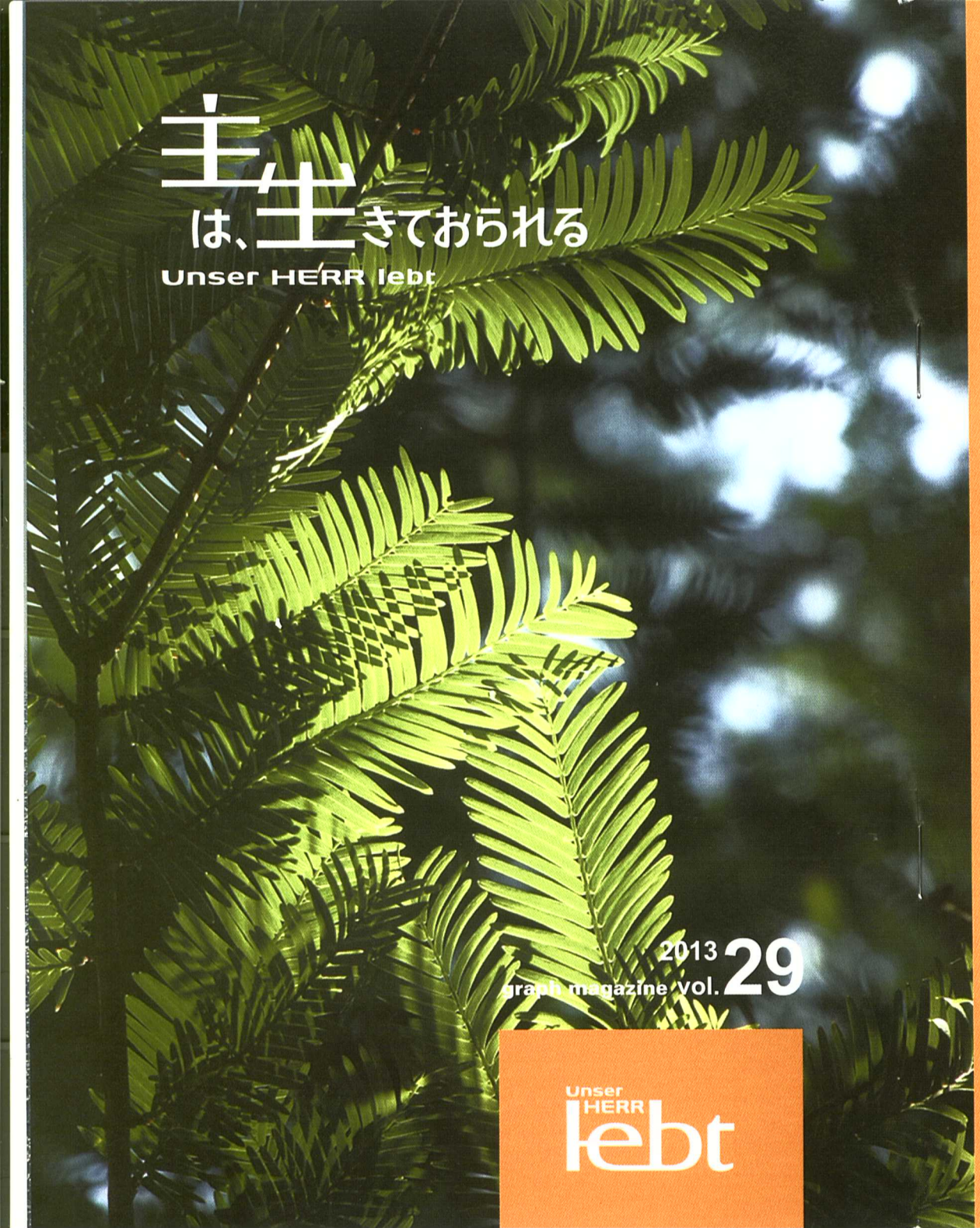
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2013 graph magazine vol. 29

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 29 定価100円（本体95円）

Unser HERR lebt

主は生きておられる

メッセージ

4 キリスト者の使命(1)救われた目的 ゴットホルド・ベック

記念会・納骨式

16 死んでも生きる ゴットホルド・ベック

死んでも生きる—7人の証し

21 夫の納骨にあたって 池田可代子

23 夫の記念会に際して 遠山禮子

25 母の納骨にあたって 河口智子

26 父の召天 長岡健次

28 夫の納骨にあたって 井上公子

30 主人の納骨に際して 河合みづゑ

32 主人の納骨にあたって 武沢和子

10人の証し

34 夫を天国に送って 志賀かよ子

39 主イエスを信じなさい。あなたもあなたの家族も救われます 神田ゆう子

49 こんな私を主は信仰に導いてくださいました 原八朗

57 イエス様のあわれみのまなざし／私のような者でも 国中千世

63 イエス様は私をしっかりと受け止めてくださいます 松尾寛子

68 科学と常識から聖書の真理へ 会沢道広

73 イエス様はそばにいて、私の前を歩んでくださいます 会沢美世子

77 イエス様は決して捨てないお方です 室田恵子

83 将来と希望を与えてくださるイエス様 加藤和彦

89 わたしがあなたを贖ったのだ 加藤実穂

キリスト者の使命

（1）救われた目的

ゴットホルド・ベック

私たちの人生において最も大切なことは、救い主をもつことです。それは、主イエス様を体験的に知るということです。救いの神を体験した人、ダビデは言います。「主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた」（詩篇　118・14）と。またイザヤも言います。「見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた」（イザヤ　12・2）。そして、マリアも「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます」（ルカ　1・46～47）と言っています。

救いの神を知って初めて、私たちはこの地上で本当に満たされた生活をすることができます。真に満たされた人生は、「永遠のいのち」、「主なる神との平和」、「罪の赦し」、そして、主イエス様が私たちを心配し、導き、守っていてくださるという「確信」が土台になっています。特に、死後は永遠に主と交わり、主と栄光を共にするようになるという確信が、最高の宝物です。いつまでも主と共にいられることを思うと、主を礼拝しないではいられません。このような永遠の栄光は、私たちが主を知って新しく生まれ変わることによってのみ、可能になるものです。ですから、新しく生まれ変わることが人生にとってどれほど大切であるかお分かりになると思います。

> 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。
>
> （1ペテロ　2・2）

成長

聖書は、新しく生まれ変わったばかりのキリスト者を「幼子」のようなものだと言っています。赤ん坊は、いつまでも赤ん坊の状態にとどまっているのではなく、当然、成長することが期待されています。けれどもパウロは、コリントにいる兄弟姉妹たちに対し、次のように言わざるを得ませんでした。

> 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
>
> （1コリント　3・2）

パウロはまるで子をもつ母親のように振る舞い、コリントの兄弟姉妹たちにはミルクを飲ませるようなことしかできませんでした。ミルクは確かに消化によい食べ物ですが、それは救いの「基礎」を形成するためのものでしかありません。コリントにいる兄弟姉妹たちは、例えばエペソやコロサイにいる兄弟姉妹に書き送ったような深くて高尚な真理を、まだ理解することができなかったのです。パウロの目的は、いつまでも乳飲み子の世話をすることにはなく、兄弟姉妹たちが「完全なおとな」になることにありました。彼は言っています。

> ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。
>
> （エペソ　4・13～15）

救い主をもつことは確かにすばらしいことです。でも、それだけでは決して十分ではありません。肝心（かんじん）なことは、主イエス様の御手の中に私たちが置かれ、主が私たちのすべてをご支配なさることです。恵みによって主イエス様を知る

ようになった私たちが、さらに、主イエス様に用いられる器となるには、イエス様を「主」として体験的により深く知ることが重要です。

そのために、主を信じる人は、生活のすべてが主イエス様のためになされるよう、絶えず主に従っていかなければなりません。真の「キリスト者の生活の目的と使命」について正しく理解する必要があります。それは、「永遠の勝利の冠を得る」ために生きていくことに他なりません。

信仰的戦い

新約聖書では、世の中で行われる「競技」を、信じる者の霊的・信仰的戦いと比べながら、信仰者に励ましを与えようとしています。そこで、当時のギリシャ・ローマで行われたスポーツ競技について少し考えてみましょう。当時ギリシャでは「健全なる精神は、健全なる身体に宿る」と考えられていました。男女の別なく、幼いときから運動を通して訓練を受けた人々が成人したときには、とても美しく健康な体が形造られていたのです。それは、その当時の彫刻などにもよく現われています。言語的にみても、ギリシャ語では「良いもの」と「美しいもの」の二つのことばが同じ語源から作られています。このようにギリシャでは善と美とが理想とされ、一方のローマでは政治と力とが理想とされていました。両者の理想は異なっていましたが、スポーツによって理想が達成されると考えられたところは同じでした。

ところが、ギリシャやローマのスポーツは常に偶像礼拝と結びついていました。例えば、オリンピック競技はゼウス神をほめ讃えるのが目的で開かれました。オリンピアの中心にはゼウスの祭壇が築かれており、すべての競技が終了すると、この祭壇の前で華やかな行進が繰り広げられたのです。またコリントの近くで行われた競技は、海の神ポセイドンをほめたたえるためのものでした。太陽神アポロを記念するために開かれた競技もありました。ローマでは競技を始める前に、神々の偶像が車に乗せられて競技場を一周することが慣例になっていました。

当時のスポーツ競技は偶像礼拝と結びついていたのですが、パウロは妥協したわけではありません。ギリシャやローマの人々がよく知っている「競技」を例にして、信仰生活を分かりやすく説明しようとしたのです。主イエス様こそ「救い」であり、主なる神の力の現われに他ならないという福音が語られ、主イエス様がご自身を現わされるときに、暗闇は完全に打ち負かされます。このことを体験したパウロは、語っています。

> 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。（ローマ　1・16）

福音の力は、主イエス様と私たちが結びついているときにだけ現われることを忘れてはなりません。聖霊が私たちのためにとりなしておられます。大切なことは私たちがすべてを主イエス様にゆだねることです。主イエス様を信じるということは、勝利の戦いを勝ち取ることです。ですから、私たちはこの力によって、約束された勝利の冠を得るために、急いで走らなければなりません。主イエス様から与えられた力によって、主のご目的に向かって走ることが必要です。救われた者の生涯は、「心のおもむくままの散歩」ではなく、まさに「勝利の冠を得るための戦い」なのです。私たちはそのときに、決して自分自身の力によって戦うのではなく、主の恵みと憐れみによって与えられた、上からの力によって戦わなければなりません。

新約聖書にギリシャ・ローマ時代の競技が出てくるのは何のためでしょうか。それは「イエス様を信じ救われた」というだけでは十分ではなく、永遠の戦いの目標があって、それこそが重要であると教えているのです。

私たちは、今以上に深く主イエス様を信頼し、すべてをゆだねなければなりません。私たちは真剣に、そして、喜びに満ちて、主に従っていくべきです。私たちは、主の証し人として用いられなければなりません。ですから、目標を目指して走り続け、主イエス様において上に召してくださる主の賞与を得ようと努めようではありませんか。

この世のものはすべて過ぎ行くはかないものです。ただ、永遠なるものだけが、いつまでも存続するのです。そのゆえに、

永遠なるものを目指し、一心にならなければなりません。このような「信仰の戦い」をするには、与えられた霊的なエネルギーを惜しむことなく、出し尽くして、主のために生きなければなりません。

私たちが目指している目標は、素晴らしい栄光に満ちています。忠実な主のしもべとして最後までご奉仕するならば、それによって得られる報いは大きいのです。生きておられる主イエス様は、信仰ある者に霊の力を十分に備えていてくださいます。「勝利の冠」を目指して主の御力によって走りましょう。

格闘

主イエス様は、私たちに大胆な証しをする勇気、信仰の確信、確実な勝利を与えてくださいます。キリスト者の生涯は、いわば、「格闘」のようなもの、つまり悪霊に対する闘いです。パウロが言っています。

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

（エペソ　6・10～17）

キリスト者の生涯は、前に言ったように競技場で競争する走者のようなものです。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ　3・12～14）

私たちは、この世のいろいろな力に対して、霊の戦いをしなければなりません。そこでは、悪魔の要塞が打ち砕かれることが問題です。

私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができているのです。

（2コリント　10・4～6）

恵みによって救われた者は「走者」であり、「戦士」であるとも言えます。

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。

（2テモテ　2・3）

主イエス様のためにご奉仕することは、言い換えれば「聖なる戦い」を戦うことです。主イエス様のしもべとして、証し人として堅く立とうと思う人は、この戦いの意味を自（おの）ずから感じ取るはずです。というのは、私たちが主イエス様と共に行こうとするときには、信仰を否定する人々から強い攻撃を受けることが明らかだからです。それが主イエス様を受け

入れない人、すなわち生まれながらの人間の性質です。彼らは、みな、口をそろえて「私たちは、主イエスが王になることなんか望んでいない」と反対します。

しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、「この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。」と言った。

（ルカ　19・14）

内面的戦い

信仰の戦いの敵は、外にばかりいるわけではありません。内面にも戦いがあります。内面的戦いにおいては「聖化」ということばがよく使われますが、それは私たち人間が小さくなり、主イエス様ご自身の姿が大きくなることを意味しています。いつかは「古いもの」がなくなり、「新しいもの」がもたらされることになります。

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

（ヨハネ　3・30）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

救われた兄弟姉妹の内側には「古い性質」と「新しい性質」とがありますが、この二つは併存することのできないものであり、「対立」するものなのです。聖書は言っています。

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

（ガラテヤ　5・17）

このような内面的な戦いは、私たちの肉体が存在しているかぎり、絶えず行われるものです。しかし残念なことには、多くの救われた人々の内側では、これら二つのものは対立しあうどころか、むしろ「妥協」していい加減な状態になっており、それに慣れてしまっているのではないでしょうか。その結果、聖霊の導きに対して鈍感になったり、優柔不断な態度のために証しをする力がなくなったり、この世のことばかりを考え、自分の思いや望みが完全に塵（ちり）にまみれてしまったりするのです。

このような妥協した生活との決別は、早ければ早いほど簡単であり、徹底的であればあるほどよいことは言うまでもありません。主の血によって買い取られた人は、常に競技者であるべきです。

また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

（2テモテ　2・5）

ここにある競技の規定とは、忠実に公正に守られなければならない約束事です。例えば、マラソン大会に出場して、楽をしようとして正式のコースからはずれ最短距離を走って「ゴールイン」しても、勝利の栄冠は得られません。信仰の戦いにおいても、主イエス様をまったく信頼し、すべてを主イエス様にゆだねることなくしては戦えません。主イエス様は、決して妥協をゆるしておられません。ですから、「古い性質」と「新しい性質」とがゴチャゴチャになってしまうことは退けられなければならないのです。この戦いは真剣なものです。主イエス様に対する信仰を「揺るぎない心」で持ち続け、主に従っていかなければなりません。

彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

（使徒　11・23）

これまでのことは、主のものになったキリスト者が信仰生活

で果たすべき「責任」だと言えます。しかし、確かに自分の意志で決定することは大切ですが、主の力によらずに、自分の力で栄冠を勝ち取ろうとしたり、古い性質に対して戦おうとすることは正しくありません。

では、一体、本当に主のものになった兄弟姉妹の目印とは、どういうものでしょうか。

第一に、主のみことばである聖書を愛する。

第二に、兄弟姉妹との主にある交わりを求める。

第三に、ことごとく感謝をもって祈りと願いとを捧げる。

第四に、悪いと分かっている物事や人々から離れる。

これらが主イエス様の勝利の現われです。

残念なことに、多くの兄弟姉妹たちは、自分の利益を考え、この世の愛を求め、他人を冷たくあしらったり、心が頑なであったりします。また生き生きとした祈りの力を体験することがなく、証しにも力がなく、みことばを尊重せずに、罪に負けてしまうのです。果たして、このような状態からの逃れ道は、あるのでしょうか。もし、主イエス様が私たちの中で勝利を収めておられるならば、同時に罪の力に対しても、勝利を得ているはずです。

悲しんではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。

（ネヘミヤ　8・10）

主を喜ぶことはあなたがたの力です。つまり、毎日の生活の中で主を喜び賛美することが、勝利を得る力に他なりません。私たちが主イエス様を見上げ、主イエス様に従い、主イエス様にとどまるならば、罪に対する勝利は実際のものとなります。その結果、私たちは喜んで光の中を歩むことができるようになります。栄冠を得るために、私たちは決して中途半端であいまいな態度をとるのではなく、すべてを主イエス様にゆだね、主イエス様により頼むことが大切です。

勝利の冠を得る人々

最後に、どういう人が勝利の冠を得ることができるのでしょうか。パウロは次のように言っています。

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

（1テサロニケ　2・19）

ここで「あなたがた」と呼ばれているテサロニケの兄弟姉妹たちは、パウロを通して主に導かれただけでなく、主の恵みによって成長し、豊かな実を結ぶようになりました。その意味で彼らはパウロの喜びでした。

思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。

（ダニエル　12・3）

このような人々と対照的に、一人も主に導かなかったキリスト者が、勝利の冠を得ることはできるでしょうか。それは決してできません。

前に紹介したギリシャ・ローマ時代の競技には、多数の観客が集まりました。「サーカス」というローマの競技場では、パウロの時代に約二十五万人、それから四世紀になると三十八万五千人もの観衆が集まったと言われています。それに対して私たちの信仰生活の戦いは、ただ単に周囲の人々から見られているだけではなく、主イエス様をはじめとする、目に見えない世界にいる存在者たちからも見守られていることを忘れてはなりません。

ローマ時代の格闘技は、人間同士の力を競い合うスポーツから、次第に人間と野獣との闘いに変わっていきました。例えば、ライオンとの格闘は、はじめは犯罪者だけがさせられたのですが、ネロの時代になると、主イエス様のものになった人々をも闘わせ、ひどい場合には主を信じる者に油をかけて火をつけるということなども、平気で行われたのです。

パウロはローマ書16章の中で多数の兄弟姉妹の名前を挙げて、それらの人々について語っています。例えば「キリスト・イエ

スにあって私たちの同労者である○○」（3、9節）、「主にあって私の愛する○○」（5、8、9、12節）、「私といっしょに投獄されたことのある○○」（7節）、「キリストにあって練達した○○」（10節）、また「主にあって選ばれた人○○」（13節）と言っています。ここに挙げられた兄弟姉妹の大部分は疑いもなく、パウロ自身と同じように、迫害され、殺されたのです。この「ローマ人への手紙」が書かれてから約六年後には、特にローマを中心として、主のものとなった兄弟姉妹たちに対する大きな迫害が始まりました。けれども、そのような酷（ひど）い迫害にもかかわらず、これらのキリスト者は少しも死を恐れることなく、主を信じる喜びをもって、その苦しみを甘んじて受けたのです。

一方、迫害や死を恐れて信仰から離れてしまったキリスト者もありました。例えば、デシウス皇帝のときに行われた迫害では、七十二歳になる老人が、皇帝の命令に服従して偶像崇拝を行ってしまったことが古文書に記されています。つまり、彼は主イエス様のことを思わず、人のことを思ったために、この世と妥協して信仰から離れてしまったのです。当時のローマの役人が、その老人が偶像崇拝するのを見たと証言しています。この古文書が記していることは、なんという恐ろしい悲劇でしょうか。キリスト者のある人たちは、主イエス様を否んでこの世と妥協し、殺されまいとして、自分が本当に偶像崇拝しているところを役人に見せ、それを公に証明してもらったのです。このことは、現代に生きる私たちキリスト者の行う証しとどのような関係をもっているのでしょうか。いったい、私たちの信仰の証しはどうなのでしょうか。イエス様は次のようにおっしゃいます。

ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。（マタイ　10・32～33）

主イエス様のものとなったすべての兄弟姉妹がもっている使命とは、まさに、主イエス様ご自身を証しすることに他なりません。主イエス様が私たちの中で大きくなればなるほど、真剣に主イエス様を証ししざるを得なくなります。つまり、私たちがどのように証しをするかということは、すべてイエス様と自分との関係にかかっています。私たちが聖霊によって満たされれば満たされるほど、救われている事実と感謝と喜びを一人でも多くの人に告げ知らせたいという気持ちが強まってきます。

私たち一人ひとりが、主イエス様は自分にとってどんな意味をもっているかをはっきりさせなければなりません。主イエス様のものとなったキリスト者なら、誰でも証しをすることができます。そして、証しはどこででもできることです。ことばや行いによって証しをするのは、相手との関係が良いか悪いかとは関係がありません。主イエス様が私たちの心の目を開くことがおできになれば、私たちはそのときこそ、感謝と喜びとをもって、大胆に主イエス様を証しすることができるのです。

けれども、証しをすることは常に戦いと結びついています。

キリスト者の使命　（1）救われた目的

信仰の道は、戦いと献身によって前進するもので、それは素晴らしい栄光に満ちた勝利の生涯です。私たち主のものが、すべてを主にゆだねることができるならば、豊かに実を結ぶことができます。

信仰はいつも、十字架の道と結びついていることを忘れてはなりません。十字架の死と復活を経験された主イエス様との交わりだけが、あらゆる信仰と聖化と証しの源です。主イエス様はかつて「あなたがたは、わたしの証人です」とおっしゃいました。私たちは果たして本当に「証し人」になっているでしょうか。私たちは家庭や学校、職場あるいは故郷において、真の証しをしているでしょうか。本当の証し人とは、力、勇気、知恵、愛に満ちた人でなければなりません。主イエス・キリストのものとして、主にすべてをゆだね、証しの生涯をおくる人でなければ、誰も、主と共に生き、主のために死ぬことはできません。日常生活の中で、忠実に主イエス様を証しし続けなかったならば、大きな問題や、避けられない試練に直面したときに、すべてを主にゆだねて従うことはできないでしょう。

死んでも生きる

ゴットホルド・ベック

このようにして、愛する兄弟姉妹たちの記念会また納骨式で、神のみことばである聖書について少しだけ一緒に考えることができるのは本当に感謝です。「死は終わりではない」、「死んでから始まる」、これこそが心にとめるべき大切な事実です。この世の人生は、永遠の世界のための準備期間に過ぎません。今日、記念会・納骨式をする兄弟姉妹たちはこの確信を持ったのです。

主イエス様は宗教家ではなく、「本物」の神です。宗教は、救われるためには勉強しなければだめ、努力して立派にならないとだめ、と言いますが、それらはみな偽物を求めるためのことばです。しかも偽物はただではないのです。しかし、本物が提供してくださるもの、すなわち罪の赦し、神との平安、生ける希望、永遠のいのちは全部ただです。金で買えないものだからです。

十字架の上で私たちの身代わりとなって死なれたイエス様は宗教家ではなく、宗教と関係のないお方です。イエス様は、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(ヨハネ 11・25)と約束してくださいました。天に召された兄弟姉妹たちはそのことを確信しました。今は、もちろん彼らを目で見ることはできませんし、彼らの声を耳で聞くこともできません。けれども、イエス様の約束のゆえに、彼らは生きています。私たちよりも元気で、弱さも苦しみも孤独もなく、喜びばかりです。本当にうらやましい限りです。彼らがそういうふうになったのは、神のみことばである聖書に頼ったからです。聖書は勉強してもわかるものではありません。しかし、素直に信じれば力になります。安心して希望を持って生活することができるようになります。兄弟姉妹たちはそのことを経験したのです。

人間の心の奥底を知っている方、人間を絶対に誤解しないで、まごころから愛していてくださるお方とは、万物の創造主、万物の支配者であられる生けるまことの神です。造り主なる神、万物を支配なさるお方は、自分自身をイエス・キリストとして明らかにしてくださいました。イエス・キリストの名前はいっぱいあります。ひとつの名前は「望みの神」です。「慰めの神」とも言われます。残されたご家族は、確かに寂しくなったでしょう。

けれども「死は終わりではない」のです。すべてのものを支配なさっている主なる神はすべてをご存知で、二つの計画を持っておられます。すべてのことがこのご計画にそって、万事益となるために働いています。主なる神は完全なお方であり、ご計画も間違いなく完全です。私たちは、イエス様によってこの確信を持つことができるようになりました。

主なる神は人間の苦しみを望んでおられるのではありません。人間ひとりひとりに最も良いものを与えたいと望んでおられます。イエス様は次のように言われたことがあります。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。　(ヨハネ 13・7)

この世にいる限り、人間は何かにつけて「なぜ」と考えます。けれども考えてもわからないのです。主なる神は必要のない悩み、必要のない苦しみを与えることはなさいません。その主なる神のご計画が、私たちにわかっていないだけなのです。万物の造り主はすべての背後にあって、目的を持って導いてくださっています。人間の視野は狭く、私たちはいくら考えても理解できません。しかし、主なる神、万物の造り主は決して過ちを犯すことをなさいません。私たちには理解できないことがたくさんあっても、主なる神は私たちに最も益となることを考えてくださいます。

イエス様は、「悲しむ者は幸いです」(マタイ 5・4)と、はっきり言われました。人間が不幸とみなすものは、幸せになるため、まことの救いを自分のものにするためにどうしても必要なものなのです。うそを知らない、真実であるまことの神は「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」(ヨハネ 6・

37）と約束しておられます。その意味は、自分自身を低くする者、イエス様の前に頭を下げる者、憐れみを請う者は、間違いなく受け入れられる、ということです。ですから、イエス様を信じることとは、自分の無力さ、惨めさ、罪深さを認めることなしにはありえません。自分を低くする者は、主なる神に良しとされ、受け入れられる、と聖書ははっきりと言っています。本当の救いは人間の努力、研究、そうしたことで得られるものでなく、主なる神の恵みの現われです。天に召された愛する兄弟姉妹たちが、今もしここまで来ることができれば、必ず、へりくだったのはよかった、恵みを請うようになったのはよかった、へりくだれば絶対に後悔しない、と言うでしょう。

聖書の中に次のような文章があります。「あなたの神に会う備えをせよ」（アモス 4・12）。その意味は、安心して確信を持って死ぬことができるように備えなさい、ということです。備えあれば憂いなしと言われるように、いつ死んでもよい、行き先は決まっている、天国だと確信できる人は本当に幸せです。イエス様は、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と言われました。兄弟姉妹たちは一度死にました。けれども生きているのです。夢のような世界、死を知らない世界にいるのです。そこは、苦しみ、悩み、孤独を知らない世界です。ですから私は、兄弟姉妹たちをうらやましく思います。残されている私たちはどうでしょうか。朝起きて、まだ生きているのはうれしくて、うれしくてしょうがないと思う人はあまりいないと思います。人間は悩む者です。それは、悩む必要があるからです。何の悩みも苦しみもなければ、人は誰も助けを求めません。助けを求めなければ助け主を知る可能性はない。そうなれば悲劇的です。イエス様は、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と言われました。

イエス様とはどういうお方でしょうか。へりくだれば、受け入れてくださるお方です。イエス様とは人間によって作られたキリスト教という宗教と関係のないお方です。イエス・キリストは無宗教です。人間はだまされやすいから宗教は存在しています。宗教はうまくいく商売にすぎません。どういう宗教に入っても、遅かれ早かれだまされたとわかります。キリスト教に入らないで素直にイエス様に頼れば、絶対に後悔しません。

イエス様はもちろん無宗教です。宗教と関係のないお方です。では、どういうお方でしょうか。新約聖書の中で、イエス様が死人を生き返らせた三つの記事があります。

第一番目は、ひとりの立派な人格者ヤイロの娘の記事です。この娘は亡くなりました。かわいい十二歳の女の子でした。この子が死んだとき、人々は親を慰めようと思いましたが、だれにもできませんでした。けれどイエス様が現われ、命令なさると死んでいた子は生き返ったのです。

第二の記事は、ひとりのやもめの息子が生き返ったことです。息子の死体は墓に運ばれる途中でした。イエス様は葬式の列に出会い、「起きなさい」（ルカ 7・14）と命令して、やもめの息子を生き返らせました。

第三の記事は、四日も墓の中にいたラザロを生き返らせたことです。死体はもう腐っていました。イエス様が「出て来なさい」（ヨハネ 11・43）とラザロに命令したところ、彼は生き返って墓から出てきた、とあります。

結論として何が言えるでしょうか。イエス様は、いのちそのものだということです。イエス様が現われると死でさえも逃げてしまいます。まことの神であり、すべてのものを創造されたお方です。イエス・キリストのためにすべてが存在している、と聖書は言っています。

> 万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。（コロサイ 1・16～17）

人間は悩む者です。自分で自分を救うことができない者です。けれど、今日、記念会・納骨式をしている兄弟姉妹たちは、主イエス様が自分のいっさいのわがまま、過ちを贖う救いの代価を払ってくださった、と確信したのです。

主なる神は、勉強せよ、完璧になれなどとは言わないお方です。もちろん金を出せなどとは絶対に言わないお方です。主なる神の呼びかけ、今日来られたお二人おひとりに対する呼びかけ

は、「わたしはあなたを愛している」（イザヤ　43・4）です。「ありのままで愛している」というこの約束は決して虚しい空約束ではありません。宇宙の創造主、万物の支配者は「わたしはあなたを愛している」と呼びかけておられます。主イエス様に頼ると間違いなく罪の赦しを得、主なる神との平和を得、また永遠のいのちを自分のものにすることができます。

イエス様は言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」

聖書を通して提供されているまことの救いとは、人間の考える単なる楽しみ、いわゆる幸せ、健康、一時的な問題の解決ではありません。主なる神の救いは過去の克服です。罪の問題の解決です。それだけではなく、死の恐怖からの解放です。いつ死んでも行き先は決まっている。「わたしの国籍は天国である」と確信できる人々こそが幸せなのではないでしょうか。天国の状態については、ちょっと残念なのですけど、聖書は多くのことを言っていません。その理由は、天国の素晴らしさを人間は理解できないからです。天国の栄光を言い表わせることばはないのです。

聖書はただ、「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない」（黙示録　21・4）と記しています。まあ、夢の世界です。病気を知らない、苦しみを知らない、孤独を知らない世界、それは私たちにとっては考えられない世界です。けれど兄弟姉妹たちはこの世界を知るようになったのです。

来たるべき栄光は素晴らしいものです。だから聖書は簡単に言っています。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。　（ローマ　8・18）

この確信を持つ人々こそが幸せなのではないでしょうか。

（これは、二〇二一年九月、御代田の記念会・納骨式でのベック兄のメッセージです。次の七人の証しは、その記念会・納骨式で語られました。）

夫の納骨にあたって

池田　可代子



息子さんを間に、和收さんと

池田和收兄の妻の可代子です。

今日は和收さんの大好きな兄弟のご家族、お友だちの皆様にもご参列いただき本当にありがとうございました。

ちょうど昨年の今ごろ、知人の納骨式で夫と共にこの場に集わせていただきました。夫はつねづね、私や息子を集会に運んでくれていましたが、いつもは集会が終ると「さあ帰るよ」と言うだけでした。しかし、その日は何故か兄弟姉妹方のお証しが心に留まったようすで、「皆、上手だなあ」と感想をもらしていました。そのあと、ある別荘でお昼のお交わりが与えられ、自分たちにはまだ先のことのように思いつつ、お墓や納骨の話などを楽しく語らったことを昨日のように思い出します。今は、夫もイエス様のもとで驚いたり、喜んだりしていることでしょう。私たちには明日のことはわからない、としみじみ思います。

夫の体調はそのころ、少しずつ悪くなっているようで、心配でした。しかし、本人は仕事優先、なかなか病院に行くことができず、三月十二日入院となった時は、原発不明の癌が広がり末期状態ということでした。

当初、外泊が許され、家に帰ったおりに「それでもがんばりたい」と泣きながら叫んだこともありました。そして、治療の方は抗がん剤も効きませんでしたが、与えられた約三ヶ月の入院生活は、共に顔を合わせて語らい、食事をし、家族との密度の濃い交わりをもち、またイエス様に出会うことができた貴重な時間であった、と思えて感謝でいっぱいです。

夫は亡くなる一ヶ月前の五月九日にベック兄とのお交わりをいただき、「天罰で与えられた病気」という恐れから解放されました。その時、イエス様に愛されている事実をお聞きし、「了解しました」ということでした。ベック兄がお帰りになった後で、「正直に話せたと思うよ」とほっとしたようすでした。

病状が進んでいくある日の夕のこと、脚がパンパンにむくみ、

身体もひどく重そうで「救い、救いと言っても俺にはわかんねェや。聖書は重くて開けねェし」と苛(いら)だった時、「お父さん。これ読んでみて」とさし出した詩のカードを「これは軽くていいや」と受け取り、じーっとその詩を読みました。そうして「これは俺の心だ」とはっきりとした声で言いました。生前、夫自身からは皆様にイエス様のことをお伝えする機会はなかったかと思いますが、夫の心、そして私たち家族によくしてくださったイエス様のご愛を、この詩を通して知っていただけたら幸いです。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、詩を読ませていただきます。

病者の祈り

(ニューヨーク・リハビリステーション研究所の
壁に書かれた一患者の詩)

大事を成そうとして力を与えてほしいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと弱さを授かった
より偉大なことができるように健康を求めたのに
よりよきことができるようにと病弱を与えられた
幸せになろうとして富を求めたのに
賢明であるようにと貧困を授かった
世の人々の賞賛を得ようとして権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと弱さを授かった
人生を享楽しようとあらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようにと生命を授かった
求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意にそわぬ者であるにもかかわらず
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた
私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ

池田可代子／一九四七年十月　長野県上田市生
中野市立平岡小学校、高社中学校、県立中野高校、長野県短期大学児童科卒業
子　三男

夫の記念会に際して

遠山　禮子


前列左端が禮子さん、納骨式にみなさんと

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

(ヨハネ　11・25)

夫(遠山徳次)が天に召されてから今日で一年と二ヶ月たちました。召された時はとても悲しかったのですが、次のみことばに出会い感謝の気持ちでいっぱいになりました。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

(ヨハネ　14・2～3)

夫はとてもやさしい人でした。クラシック音楽をこよなく愛し、家族揃って聞くのを楽しみにしていました。

また子どもたちが学校に通っていた頃、帰りの時間が遅くなると四人の子どもの帰宅時間がそれぞれ違っていても、電話が鳴るたびに迎えに行っていました。私が祈り会に行きたいと言えば必ず送ってくれました。「信仰は自由だからいいよ。けれど僕はさそわないで」と必ず言っていました。

夫は晩年になってALS(筋萎縮側索硬化症)という難病を与えられましたが、人工呼吸器をつけなければ呼吸をすることができない状態でした。人工呼吸器をつけると言葉が聞こえない、食べ物も口から摂(と)ることがむずかしくなりました。胃ろうの手術をしていただいて液体流動食を点滴のようにして少しずつ落としていました。そのような時にも、つねに笑みをたたえていました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。
（ヘブル　13・5）

主人の本を整理していましたら、聖書にちなんだ本が二冊出てきました。病気がちの夫がその本を選んで読んだのは、ＡＬＳという難病をわずらった時にイエス様に出会わせていただくためだったのかなあ、と思いました。

療養中、ベック兄や兄弟姉妹が時おり見舞ってくださいました。夫は初めのうちはびっくりしていた様子でしたが、しだいにとても喜ぶようになりました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
（１テサロニケ　5・16～18）

先日、宇都宮に住んでいる私の友人（八十三歳）から電話がありました。ベック兄のお話のテープを贈ってさしあげたのですが、とても喜んでくださって「何回も聞いているよ」と言ってくださいました。またテープをお贈りしようと思っています。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。
（箴言　3・6）

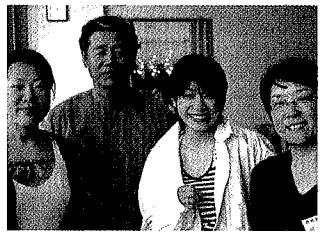
今日は本当にありがとうございました。

夫（故）遠山徳次／昭和二年三月二日生まれ（新潟県）
東京教育大学中退（病気のため）

遠山禮子／昭和十年五月八日生まれ（新潟県）
新潟療養所附属看護婦養成所卒
子ども四女

母の納骨にあたって

河口　智子


左から長女のナオミさん、夫の有介さん、次女のルツさん、智子さん

福岡集会に集っている河口智子です。今日は、二〇二一年一月に召された母（早瀬鶴子）の納骨をすることができまして感謝です。

母は一九二七年にインドネシアのジャカルタで生まれ、長崎で育ちました。十八歳の時、原爆に遭（あ）いましたが、幸い助かりました。二十二歳で連れ合いを病気で亡くし、再婚しましたが、うまくいきませんでした。そのような中で、母は、両親と子どもたちのために女手一つで働き続けました。子どもだった私は母の内面の寂しさを知りませんでした。しかし、福岡でのベック兄の福音メッセージの中にサマリヤの女の人の話があり、「五回も結婚したのは、愛されたかったからだよ」とお聞きして、母も愛されたかったのだ、と思わされました。

私が教会に行き始めた頃、母は、「お父さんは、あなたが小さい時、教会に連れて行ったことがあった。だからあなたは、イエス様を信じたのかねえ」と言っていました。

人の望むものは、人の変わらぬ愛である。
（箴言　19・22）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
（イザヤ　43・4）

私は、母に「イエス様に愛されているよ」と話しました。母は、「それは本当にありがたいねえ」とにっこりしました。福岡集会の多くの兄弟姉妹に祈っていただき、母は施設の中で穏やかに日々を過ごしていました。

晩年、母は両方の大腿骨を骨折、また左足を壊死のために切断、それから癌と、あっという間に悪くなってゆきました。私は、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒　16・31）の約束のみことばから目を離

父の召天

長岡 健次

父長岡一巳は、八十七年の生涯を自由奔放に、だれの目も気にすることなく、自分の信じる人生を送ってきた人でした。そのような父を、息子の目から振り返りますと、大変に波乱万丈なものではなかったかと思います。


ご両親

戦争を経験し、終戦後の混乱期に事業を興し、今日に至るまで会社や家族を導いた父でありました。これといった趣味もなく、天に召される少し前まで、仕事を気にかけ、前向きに生きてきた父であったと思います。

父は、非常に家族思いの人でした。いつも家族のことを忘れず、家族が安全に、また健やかに生活できることを、何よりも考えていました。家族を幸せにすることが父の趣味であったのではないかと、今になって思います。こんな父を、私は大いに尊敬していま

さず、主がこれからどのようにされるのか、祈りつつ導きを求めました。主は祈りに答えてくださり、キリスト集会で葬儀を行うことについての家族の了承が得られ、聖書に基づく葬儀を集会ですることができました。また、このように御代田の福音センターでの納骨まで備えてくださり、親族も福岡、東京から集ってくださって、本当に感謝です。ありがとうございました。

河口智子／一九四六年、長崎市で生まれる
福岡市立田島小学校、同友泉中学校、同福岡女子高等学校卒
㈱富士設計コンサルタント、箱崎伝道館（キリスト教書籍販売）
福岡クリスチャンフィルムセンター
一九七五年、結婚
夫・河口有介、一男二女

す。しかし、私が聖書の話をしたり、イエス様のお名前を口にしたりすると、父はあまり機嫌よく聞いてくれませんでした。時には「イエス様、イエス様と言うな」と怒鳴られたりもしました。でも、時々は集会に来てくれることもあり、また祈っていることもありました。

このような父でしたが、若い頃は悩むことが多かったと聞いています。東京での学生時代に、深い悩みの中で聖書のみことばに出会い、特にヨハネの福音書を愛読していたと話していました。しかし聖書を読んで祈っても、現実が願いどおりに変わっていかないため、失望して聖書から離れてしまった、ということでした。

それから六十数年が経ち、最近になって母が病気を通してイエス様に出会い、救われました。この母の救いの時、父はなぜか喜んでおりました。そして、父も病気がちになり、二〇一二年に交通事故をきっかけに、闘病生活を送るようになりました。その苦しみの中から、再び聖書を求め、イエス様に祈り、頼るように変えられていったのです。

神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。
（ヤコブ　4・6）

父は、長い間神様から離れていたことを悔い改め、喜んでイエス様を信じて、永遠のいのちをいただきました。そして今、体は滅びましたが、霊と魂は天国で生きています。父が召される前日の日曜日、私は家内と礼拝に行った後、父を訪ねますと、明るくて元気でした。私どもは母も交えて四人で次のように祈りました。

愛するイエス様。私のわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします。あなたの流された血によって、すべてのあやまちが赦され忘れられていることも感謝いたします。あなたを信じますから、死んでからさばかれることがないことも感謝いたします。あなたを信じる者は、死んでも生きると約束されていることも感謝いたします。死ぬことは終わりではありません。あなたと一緒になることです。私の国籍は天にありますから感謝いたします。今からのこ

とすべて、あなたにおまかせいたします。あなたの御名によってお祈りいたします。アーメン

この最後のアーメンという言葉は、心から同意します、という意味です。父は不自由な口でしたが、言葉に応じてうなずきながら、大きな声ではっきりとアーメンと言いました。そしてその翌日の朝、イエス様が呼ばれて天国にゴールインしました。父は今、天国で生きています。喜びの中でイエス様と共に憩っているのです。私は、この天国で第二の人生を歩んでいる父に、いつの日か再び会えることを喜び、その日が来るのを心待ちにしています。そして、父に関係してくださった皆様が、唯一まことの主なる神であり救い主であるイエス様を、お知りになることができますように、また、天の御国で父に再会していただけることを、心から祈っています。

長岡健次／一九五六年　長野県生まれ
松代小、松代中、屋代高校、京都薬科大学大学院修士課程修了
大丸合成薬品株式会社　代表取締役

夫の納骨にあたって

井上　公子

井上昇兄弟の妻の井上公子と申します。今日はこのような形で納骨の式をイエス様が備えてくださいましたことを心から感謝いたします。

私の主人でありました井上昇は、仏教徒の両親からいろいろな教えを受けて育ちましたので、私が救われて集会に導かれてからも、集会へはなかなか来てくれませんでした。でもイエス様は主人を通して、ご自身が不思議な、すばらしい方であることを、私にしっかりと教えてくださいました。


左から二女の純子さん、公子さん、長女の直子さん、前が昇さん

まず、主人は、自分にはイエス様は必要ないと言っておりましたけれども、弱さを与えられました。自分ではどうにもならない、さまざまなこの世での苦しみがありましたし、八十歳で認知症も与えられました。自分ではきちんとやっているつもりなのに、すべて忘れて自分がどこにいるかもわからないような状態でした。でも、それはイエス様の恵みのみわざであることを、私は知ることができました。

そんな中で主人は、集会に行くのが大好き、賛美をすることが大好きになったのです。物忘れをするようになっても、集会で賛美するときは本当にうれしそうでした。そしてお祈りをし、みことばを聞くと、いっぱい涙をためて「ごめんなさい」と言うようになりました。イエス様が主人を小さくしてくださり、イエス様の前にこうべを垂れてすべてを祈る、ということも教えてくださいました。そしてその最後には胃がんが与えられ、何も食べられなくなりましたけれども、いつも静かですべてを受け入れていました。みことばを読むと、うれしそうに「うんうん」とうなずいていました。最後の頃には毎週メッセンジャーの方がお見舞いに来てくださり、集会の方たちも来てくださいましたが、お祈りをしていただくと、うれしそうに頭を下げて「アーメン」と言うことができました。

私は信仰の薄い者でしたけれども、イエス様がすべてをしてくださる、私が何もできなくても天国に導いてくださる、ということを、体験的に教えていただきました。

今は、主人がいなくなった寂しさはありますけれども、主人はイエス様のそばにいる、という安らかな気持ちを与えられ、朝晩の祈りのときもイエス様と共にある昇兄弟が頭の中に現われていっしょに祈ってくれます。

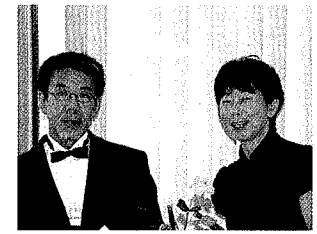
イエス様のすばらしさを体験しましたことをここにお伝えして私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

井上公子／一九三二年　京都市生まれ、
一九四四年、両親の出身地、島根県に移住
島根県立大田高女、島根師範研究科卒
一九五四年　井上昇と結婚し東京都に居住、
二〇〇〇年　栃木県に転居
長女　磯田直子、二女　井上純子、孫三人

主人の納骨に際して

河合 みづゑ

主人、河合徹の納骨に際し、一言感謝申しあげます。主人は、二〇一二年四月八日、五十八歳で天に召されました。


徹さんと

生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。…神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者 3・2、11）

このみことばのとおり、イースター復活祭の昼ごろ、主イエス様のなさる絶妙のタイミングで天に引き上げられました。

召される二年前の二〇一〇年八月七日、大腸がんが見つかり、ステージ4という末期のがん患者となりました。余命半年という医師の判断でしたが、主イエス様の大きな憐れみで、それから一年八ヶ月この世での豊かな時をいただきました。徹さんが天国に行ってしまってから、私たち家族は寂しさのなかでよく泣きました。五月十二日の徹さんの誕生日には、夜遅くまで思い出話しをしたり、悪口を言ったり、泣いたり笑ったり、「泣きすぎて目の奥が痛いね」と言い合いました。時間の経過とともに、また数々のみことばの励ましのなか、主イエス様の御愛の内、泣き虫もだんだん収まっていきました。

「徹語録」という、徹さんの言葉が詰まっている“私にとりましては宝物”がありますので、少し紹介させていただきます。先ずは二十年近く前になりますが、一九九四年十月十二日の夜のことです。約一週間の「ドイツ喜びの集い」のメサイアキャンプに演奏要員として、集会の仲間に加えていただき、チェロを担いで出かけて行きました。私と息子は留守番をしました。帰って来た徹さんは、晩ご飯の前に突然祈り始めました。「主イエス様、私には過ぎた家族をありがとうございます」と。ドイツキャンプでイエス様の御愛を知り、圧倒された徹さんのへりくだった心、砕かれた魂は完全に主の御手の内でした。私は、主イエス様にひれ伏しました。

時間がくだって、二〇〇八年九月二十二日、私の実家のある静岡県掛川市で友人とコンサートがあり、二人で演奏の機会をいただきました。私にとりましては、大きな会場で分を超えた企画で緊張の時でした。掛川の演奏会場に向かう道中、私は首をまわしたり、手をマッサージしながら「ちゃんと弾けるかなぁ」と言いました。徹さんは横目で私を見ながら「イエス様でしょ。僕は救われてから、そういうこと、まったく思わなくなったよ」と。ハハーと、ひれ伏す思いでした。がんをいただいた二〇一〇年十二月、徹さんは抗がん剤治療で食欲もなく体調も悪い時、二人でぼーっとテレビを見ていました。年末ジャンボ宝くじのコマーシャルをやっていまして、私が「あーあ、宝くじでも当たらないかなぁ」とぼやきましたら、徹さんは「これ以上は望めないでしょ。こんなに恵まれているんだから」と。末期のがん患者の徹さんのさりげない言葉に、またしても、ハハーとひれ伏す思いでした。

私たち家族、良亮、麻里子、花奏は、河合徹の相続人として、徹さんの愛する、そして、徹さんを愛する主イエス様の人知をはるかに超えた計り知れない御愛を引き継いでいきたいと願います。私たちは、愚か者で怠慢で、我が身のことを一番に思う者ですから、自分では何一つできません。主イエス様に一つひとつ導かれたいと切に願うものです。最後に、徹さんのお気に入りのみことばを、「徹語録」のとっておきの一つとして紹介して終わりたいと思います。一九九四年十月、「ドイツ喜びの集い」で主イエス様に出会ってから、主イエス様のとりこになったみことばです。徹さんはこのみことばをドイツ語で格好良く言っていました。

Ich, ich freue mich in dem HERRN.

（私自身は、主を喜びましょう） （詩篇 104・34）

主にある家族であります兄弟姉妹、とくに名古屋集会の兄弟姉妹、またがん仲間の兄弟姉妹、私たちのことをいつも我がことのように心配しお祈りくださいまして本当にありがとうございます。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。 （詩篇 103・2）

ありがとうございました。

河合みづゑ／一九五三年生まれ、静岡県掛川市出身
掛川市立東中学校、静岡県立掛川東高等学校、名古屋芸術大学音楽学部卒
夫・徹（天国）、息子・良亮とその妻麻里子　孫・花奏

夫の納骨にあたって

武沢　和子



中央が和子さん、集会のみなさんと

名古屋集会の武沢和子と申します。

夫が召されるまでのことは家庭集会でお証しさせていただきましたので、今日は十一年間の戦いについてちょっとお話しさせていただきたいと思います。主の愛と憐れみと皆さまのお祈りに感謝しつつ、お証しをさせていただきます。

夫、邦明が七十歳で召され、二〇二一年の十一月で四年になりますが、私自身の心の整理がつかず、納骨できないまま今日に至ってしまいました。十一年間にわたる食道がんと脳出血との闘病生活の間に生じた無数の心の傷が、お互いの間に隔ての壁となって高く立ちはだかってしまったように思います。召される半年ぐらい前からは最悪の状態で、夫は人格欠損症、私は自己憐憫症候群のなかでした。この診断名は私がつけたものですけれども、この状況はすべて主からのものであること、私の自我が砕かれるために必要なものであること、主はいつも最善をなしてくださる方であることとは信じていても、私の祈りはいつも早く解放してくださいという、イエス様を悲しませてばかりいる惨めなものとなっていました。次のようなみことばが与えられました。

私をあわれんでください。主よ。私には苦しみがあるのです。私の目はいらだちで衰えてしまいました。私のたましいも、また私のからだも。

（詩篇　31・9）

こんな中でまったく口のきけない状態で過ごしていた夫は、病室での二人の祈りのとき、これが最後の祈りとなりましたけれども、「主イエス様の平安がありますように」という言葉を遺して召されました。これが主のお答えであることを確信し、心から主の御名を賛美することができました。しかし私は夫の介護から解放された安堵感の中で、夫との思い出をすべて封印してしまいたい、というサタンの誘惑のなかに陥ってしまったのです。先月、八月上旬、高校生の孫の「おじいちゃんの納骨はどうするの」という問いにハッとさせられ、悔い改めの祈りへと導かれました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

この大好きなみことばのとおり、すべて整えられ、この場へと導かれています。本当に感謝です。

夫は、先に召された方々と、いまごろは天国で親しいお交わりと賛美の日々を過ごしていることと思います。

多くの方々の長いあいだのお祈りとこの納骨式を通して、私は自己中心の罪から解放していただくことができました。

主は心の打ち砕かれた者をいやし彼らの傷を包む。

（詩篇　147・3）

ありがとうございました。

武沢和子

一九四二年　宮城県仙台市生まれ

宮城県立第二女子高等学校、東京家政学院短期大学　卒業

夫　武沢邦明　二〇〇八年十一月十七日召天

一九三八年　宮城県小牛田（こごた）町生まれ

宮城県立第二高等学校、岩手大学応用化学科　卒業

一九九八年　松下電工（現パナソニック電工）　退社

夫を天国に送って

志賀　かよ子



前列右からかよ子さん、夫の三男さん、ご家族に囲まれて

二〇一二年の四月、主人志賀三男兄は六十五歳で天に召されました。この年の一月一日は日曜日でした。月末に主人のホスピス入院を控えていて、この日は、主人と共にインターネット礼拝をしました。午後には子どもたちが我が家に全員集合してきていましたが、夕方、主人がベッドの中から申し訳なさそうに、「今からお母さんと吉祥寺の夕拝に行っていいかな…」と申しました。「寒くない？」の声もありましたが、全員一致の「温かくして！」、「気をつけて！」の声を背に、嬉しそうに支度を始め、足はヨロヨロしていましたが杖をついて、本当に嬉しそうに吉祥寺の新会堂での礼拝に出かけました。これが、主人にとって最後の吉祥寺集会の礼拝でした。

私は三十七歳の時、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」（マタイ　5・3）のみことばで救われました。長女ゆう子が結婚した年から主人が膵臓がん末期と宣告された二〇一二年の六月まで、十七年間、二人で毎週の土曜と日曜、それにお盆、正月と、一年の三分の二は長野県御代田町で過ごしていました。御代田での生活は、福音センターでのバイブルキャンプ、交わりなど、主をいつも身近に感じられる生活でした。数年おきに次女佳苗、長男康弘と、子どもたちも次々とベック兄の司式で結婚に導かれました。

主を知らないでスタートした私たちの結婚生活は、平たんな道のりではありませんでした。私には厳しいことだらけでしたが、主はいくつもの試練を通して立て直してくださいました。このようにして、それ以前から集会に通っていた主人と共に二〇〇〇年十二月三十一日、受洗の恵みに与りました。それが、主人が膵臓がん末期のステージⅣBと突然の宣告を受けた直後は、私の頭は真っ白になって、どう受け止めていけばいいのかわかりませんでした。夫婦ともに苦しい闘病生活が始まりました。その時期はただただ聖書をむさぼり読んでいました。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。（ヨハネ　6・37〜40）

主人はこのみことばを与えられてから、「解放されて、自分は病気では死なない、神様の定めた時まで前向きに生きていきたい」と言ってくれました。「もしイエス様に出会わなかったら、もしこのみことばに出会わなかったら、自分の人生は後悔と無念さしか残らなかった」とも言っていました。

自宅近くの病院に転院が決まった後の七月五日、突然、「ベック兄に会いたい！連絡をとってくれないか？」と言いました。翌七月六日、早速、吉祥寺にベック兄をお訪ねし、心ゆくまでお交わりさせていただきました。まず、福音を伝えてくださったことへのお礼、そして天国の話、最後は残していく家族をお願いしますという内容でした。ベック兄の天国のお話は、希望に満ちたものでした。「天国は素晴らしくてもう三男は帰りたくないと思うよ。かよ子はますますイエス様を頼るようになるから大丈夫!!」とおっしゃってくださり、最後に「思い煩わない！心配しな

い！恐れない！」の三つの薬をいただいて帰りました。

ホスピス生活後半の三月下旬、「この三つの薬を目に見えるところに貼って！」と主人に頼まれ、ベッドの真横に置いてあった加湿器に貼りました。一月から召される四月十八日までホスピスの三ヶ月は、家族にとってかけがえのない時間でした。申し訳ないほど主人は、私に謝り続けていました。「とんでもありません。私だってかなりのものでしたから」と、私からも主人に謝りました。そんな会話の繰り返しを通して、主に出会うまでの私たち夫婦の苦しみは消えうせ、後半は天国での再会の楽しい話ばかりでした。そして最後、十八日の朝六時四十五分、「お父さんありがとう!!」と言ったその瞬間、それを待っていてくれたかのように、主人は天の故郷に帰っていきました…。

主人ががんの疑いで、病院で検査が始まった時のことが思い出されます。重い通勤バッグをいつもの癖で右手に下げ…、緊張した横顔で…、脳こうそくの後、すっかり耳が悪くなって看護師さんの指示が聞き取れず…、間違って右に行ったり左に行ったりの主人…。突然涙がこみ上げてきました。ごめんなさい！お父さん、こんなに疲れさせてしまって。養子、会社、実家の母の宗教からくるトラブル、そしてこんなわがままな私との結婚。どれをとっても申し訳ないことばかりでした。ごめんなさい、いつも私の要求にお尻を叩かれてばかりで。やりたいようにやってしまっていた私…。申し訳なくて「もうこれからすべてお父さんの決めたようにさせていただきます。イエス様ごめんなさい」とその場で主に謝り、悔い改めざるを得ませんでした。そのときから、すべて主人の思いどおりに物事を進めました。セカンドオピニオンを受けるか受けないか、転院先、ホスピスの選択など、一つひとつの方向転換に、数えきれない主の祝福をいただきました。一月からのホスピスでの生活では、主人はチャプレンの方たちと聖書を読む日が与えられ、動ける間は自ら部屋を訪ねて交わっていただいていました。そういう日々を通して、自分は信仰者として何をしてきたのか、という思いが主人に与えられ、信仰を伝えてこなかった人たちに自分の葬儀でイエス様の救い、十字架の贖いを伝えてほしい、という遺言を残しました。こうして前夜式、葬儀に加えて、異例の速さで九月九日に記念会となり、ベック兄の福音メッセージを通して、みことばが友人知人の心に届きました。

主人がホスピスで口にしていたみことばです。

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。（ヨハネ　12・24）

今、主人の親友だった一人が春日部集会に集い続けています。また相続関係のお仕事をしておられたNさんにも福音が届きました。Nさんは、召される直前に主人がプライベートの相続を依頼した方です。Nさんは弱った主人に驚いて「志賀さんは治療に専念して、後はお任せください」と言ってくださいました。その半年後の五月の前夜式と葬儀に参列してくださり、ベック兄のメッセージを食い入るように聞いておられました。しばらくして、電話があり、「すみません。お助けするつもりが、こちらが助けられました。昨日、私の検査結果が出て、胃がん末期で手術不可能ということでした。明後日志賀さんと同じ病院に入院します。ベックさんのメッセージを二回も聞かせていただき、希望を持って入院します」という内容でした。それが六月の初めころでした。長男康弘と二人でNさんのご自宅に伺ったのが、記念会も終わった九月十六日で、私にとっては三回目のお見舞いでした。かなりお具合が悪そうで、玄関で失礼しようとしましたが、中から「入ってもらってください」と細い声がかかりました。Nさんは涙を浮かべて、痩せた手を差し伸べ、驚くほど力強い握手をしてくださいました。「もうじき天国です。お父さんにお会いしたら、ヤーヤーヤーと言って握手です」と喜びと感激の十数分のお交わりでした。Nさんはその六日後に召されたことを、しばらくして知らされました。「間に合った!!寂しくなったけれど天国はまた賑やかになったね」と、子どもたちと主に感謝しました。記念会を通して播かれた聖書のみことばがどのように実を結んでいくか、祈りながら楽しみにしていきます。振り返ると、救世軍のホスピス出棺時の小さな葬儀、茶毘（だび）にふされる前に持たれた谷保でのお別れの会、社葬としての青山での前夜式、告別式、九月の吉祥寺集会所での記念会、と五回も福音メッセージが語られていました。

彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。　（ヘブル　11・4）

この九月の記念会の後は、中学一年の孫の司と盛岡キャンプに参加したり、福岡や大分のキャンプと走り続けた時期でした。しかし、葬儀・記念会に集ってくださった主人の親友のお一人が春日部集会に集われるようになった頃、春日部集会からの帰り道、突然体がぞくぞくし始め、夜から熱がでました。それからほぼ二十日間寝込んでしまいました。気持ちがどんどん落ち込んでいきました。十月、十一月はよく泣きました。泣いて運転して信号無視で十日の間に二回切符を切られ免停寸前にもなりました。先日はキャンプの合い間をぬって、お正月にかけて出入りする子どもたちのために、おせちを見にスーパーマーケットのツルヤに行きました。ふと気が付くと周りは家族連れ、ご夫婦連ればかり。突然、私は、逃げるようにレジへ…、誰にも会いたくない…。帰ろう…。

いつも買い物が大好きな主人とこのツルヤに来ていましたから、どうにもならない喪失感でした。レジを出ると、目の前に集会のご兄姉がおられて、思わず訳のわからないことを口走っていました。そのご兄姉とお別れしたと思ったら、また別の集会の方が…、そこでもうアウトでした。涙がボロボロ噴出してツルヤの中で泣きだしてしまいました。お会いしたご兄姉は驚かれ、いろいろと慰めてくださいました。その日は泣くだけ泣いて、夜、長女と集会に出ました。もう大丈夫…、と思って喜んで感謝していると、またとんでもないところで…。でも私の国籍は天国です。愛するイエス様に希望を持って召されていった主人が待っています。こんなダメな私の右の手を万軍の主がしっかり握り続けていてくださるのですから。最近ご主人が召された方とお話することが多いのです。わたしたちの国籍は天国です、としか言えないのですが、万軍の主のとりなしを祈っています。最後に、主人が私たち家族に遺していってくれたみことばです。

うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ　3・13〜14）

志賀かよ子

一九四六年七月二十六日　山口県生まれ　小学一年から東京練馬区立開進第三小学校、練馬区立開進第三中学校、東京都立大泉高等学校、共立女子短期大学英文科

主イエスを信じなさい。あなたもあなたの家族も救われます

神田　ゆう子



左から夫の茂樹さん、誠くん、恵さん、お父様の三男さん、後列ゆう子さん

私は、志賀三男、かよ子の長女として一九七一年に生まれ、弟、妹との五人家族で育ちました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

このみことばは最初にイエス様からいただいた約束です。私が十歳のときに母が救われ、私も日曜学校に集うようになり、父の救いを祈るようになりました。父にもイエス様を知ってもらいたいと、みことばを信じて祈りました。いまは天におられる愛する小川兄弟がこう言ってくださいました。「ゆう子ちゃん、お父さんは必ず救われるよ。聖書に『主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます』って約束してくれているよ。絶対に主イエス様は裏切らない、待っていようね」と、何度も励ましてくれました。疑うこともありましたが、いまわかるのは、イエス様は必ず約束を守ってくださるお方であるということです。

そして、私の小さな信仰はいつもこのみことばに励まされてきた、と最近わかります。イエス様は手放さないで、捕らえていてくださり、いつも私の背後にいてくださいました。イエス様は、父を悔い改めの涙と喜びの叫びとともに救いに導いてくださり、二〇〇〇年に両親そろって受洗に導かれました。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。（ルカ　1・45）

イエス様は私の心に住んでくださって、私を成長させてくださいました。就職して銀行で働き始めたときのことです。弱さを隠して強く見せようとがんばっていましたが、お金を扱う緊張感に心身ともに限界に達してしまいました。二年足らずで退職に導かれ、仕事からは解放されたのですが、何をしても長続きしない自分に落ち込みました。

そうしたある日曜日、姉妹会からの帰宅の途中に、自分のしてきたことが映像を見るようによみがえってきました。自分かってなことばかりしている私、イエス様を信じていても無視している私、自分は間違っていないという態度の私でした。そして自分ばかり見ている私がいました。次の瞬間、「見よ。わたしを見よ」と、十字架にかかられたイエス様が優しい目で見ておられることを知りました。「あなたの罪を罰するのではなく、赦す」と優しい目で語っていてくださいました。「そのままでいいんだよ」と。私は、「ごめんなさい、ありがとうございます。これからはイエス様を見ていきます」と祈ることができました。イエス様の赦しと一方的な愛、救われた喜びを体験しました。

その後、再就職し、主人である神田茂樹兄弟と出会い、一九九五年に御代田の福音センターで結婚に導かれました。イエス様の完全なご計画と確信しています。

わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。（エレミヤ　31・4）

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

父は、二〇二年六月に膵臓がんを宣告されました。病院の先生よりお話を聞くため、家族五人が集まって先生を待っていたとき、その後天国に召天された石山淑子姉妹が突然、お見舞いにきてくださいました。ご自分もがんであることを証しされ、「私の時は、御手の中にあります」（詩篇　31・15）というみことばをくださいました。ニコニコと、まるでイエス様によって遣わされた天使のようでした。先生と面談中、私は父のがんの状況や抗がん剤の効果、副作用の話を理解できずにいましたが、「私の時は、御手の中にあります」のみことばに浸って、大きな揺りかごの中にいる感じでした。

次の日、学び会の後で父の病気をベック兄にお伝えしたとき、三つのすごくよく効く薬を父に持って行くように仰ってくださいました。「一つ目は恐れない薬、二つ目は心配しない薬、三つ目は思い煩わない薬だよ。この薬を父ちゃんに持って行って」と。大切な薬を預かった使命感で、急いで病院へ向かいました。その途中、三つの薬を私もいただきました。恐れない、心配しない、思い煩わない。子どもの問題のことも、父の病気のことも。父に「ベックさんから薬を預かってきた！」と言いますと、父は喜んで受け取り、なんとも嬉しそうでした。次の朝、みことばのメールの交換が父と始まりました。

六月二十一日の朝、父から「みことば、ありがとう。朝、四時半に目が覚めましたが、ずっとみことばを見ているよ」とありました。

私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。（ハバクク　3・18）

私の返事はこうでした。「職場にいても、学校にいても、家事をしていても、ベットの上で寝ていても、このみことばが私たちを守ってくださいますように、祈っています」

六月二十五日、父からのメールです。「今日も疲れているの

に来てくれてありがとう。『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。（2コリント 12・9）』。『彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。（詩篇 91・15）』。このみことばを与えられて、イエス様に委ねます」

父は手術の見込みもなく治らないと宣告され、超えられない苦しみ、絶望の中におかれてしまいました。このとき父は、ヨハネ6章37節から40節を与えられました。聖書にペンで書き込むことをあまりしない父でしたが、ここにはしっかりと病院の名前と与えられた日付けが記してありました。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。（ヨハネ 6・37）

「決して捨てない」というイエス様の約束をいただいて、父は嬉しかったのだと思います。このみことばは私たち家族にも希望の約束になり、召される日が近くなるほどイエス様ご自身となっていきました。一度退院して自宅近くの病院へ転院する間に、父はベック兄のところにお礼を言いに行きました。かつてはイエス様に抵抗していた父でしたが、イエス様を伝えてくださってありがとう、と言いに行ったことは奇跡のようでした。父は死を受け入れる準備をしているのだと思いました。

二〇一二年一月二十四日の大雪の朝、父はホスピスに入院しました。その日、父はこう祈りました。「イエス様、今日までの導きを感謝します。どうか自分に揺るがない信仰、揺るがない確信を与えてください」と、ゆっくり、力一杯祈りました。ホスピスに入ってから、召されるまでの三ヶ月、仕事やこの世のことからすこしずつ解放され、イエス様に変えていただいていました。みことばで満たされている父との交わりの時間が多くなっていったことは、嬉しかったです。

肉体は痩（や）せてつらそうでしたが、いつも聖書を読んで何度も共に祈ってくれました。自分の身体のことではなくて、母のこと、私たちのこと、そして、感謝の言葉でした。

わが家には高校受験を控えていた娘がおりました。父は孫の“恵”にこう話してくれました。「主は最善を与えてくださる、主に必ず感謝しなくてはいけない、主はかならず友達を与えてくださる、イエス様を知るために必要な場所に必ず導かれる、何をするのかではなく、イエス様をよりよく知るために生かされている、主ご自身が“恵”を用いてくださるから感謝すること」こういったことを話してくれました。娘はもちろん、私までもが励まされ、主は父を通して語ってくださったのだ、と感謝しました。合格した高校はイエス様が選んでくださった学校であると確信し、安心して行けることが嬉しいと、喜んで通っております。

二月には息子の頭の血管腫検査がありました。なぜか、なんのためか、次から次へといろいろなことが起こされました。でも、いつもイエス様のご臨在を確信することができました。検査の朝、ホスピスの父から電話がありました。「大切なことを伝えようと思って電話したんだけどね。我々にはすべきことがある。何が起きようとも、まず、祈ること。これを忘れてはいけないよ、ゆう子。イエス様を知っている者として祈りをまずしなければいけないよ」と言われ、イエス様の呼びかけだと確信し、祈りました。祈りなさい、頼りなさい、信じなさい、目を離してはいけない、とイエス様から何度も言われました。

検査の結果は経過観察ということでした。ときおり頭痛に悩まされていますが、その都度イエス様に祈り、安心に導かれています。その息子から、兄弟姉妹にお話ししてほしいと言われたことを、お伝えします。

ある朝、起きてきた息子は泣いていました。「どうしたの」と聞きますと、「天国に行った夢をみた」と。「あ、天国に行ってしまって、ママや父ちゃんと離れたのがさみしかったんだね、大丈夫、夢だよ」と言いますと、「ちがう、天国にずっといたかった。天国はすごいところ、きれいで、光があって、その光があたたかくて、ゆっくり近づいてきてね。きっとイエス様だったんだよ。そして、まわりには光る建物やきれいなものがたくさんあって、きれいな水も流れていて、いろんな人が座っているんだけど、皆静かにお話しているんだよ。なんて言ったらいいのかな、とにかくきれいですごい。帰りたくなかった。僕は早く天

国に行きたい。口で説明できない、うまく言えないからくやしい、すごいんだよ。起きたら家だったから、泣いているんだ」と。私は、この息子の夢の話を聞いて、イエス様からのプレゼントで天国の見学に行ったのだと思いました。この日から息子は、早く天国に連れて行ってください、必要なものだけを与えてくださいと祈っています。主イエス様を自分の救い主としてはっきりと出会って欲しいと夫婦で祈っております。

二〇二一年十二月最後の学び会のときに、ベック兄は葬儀で使うすてきなパネルを用意してくださいました。父はパネルを見て、自分の人生を振り返ったのでしょう、「父さんも人の喜びのお役にたてたのかな…、イエス様のお役にたったのかな…」と言うので、私は「もちろん、おとうさん、私たちはロバの子です」と言い、その情景を聖書のマルコの福音書で読みました。頼りない小さなロバをイエス様は選んでくださった。どんな状態でも主は選んでくださる、お父さんも、私もロバの子で、イエス様に選ばれている、と語り合いました。集会に行った折には兄弟姉妹から祈りのおことばや、みことばのお手紙などを預かり、両親のところに運ぶ恵みをいただきました。みことばをもって行くことで私にもみことばの力を知るようにしてくださいました。十字架にかけられるイエス様をお乗せした小さなロバをふと思っていました。

父は、いよいよ弱くなったころ、「愛するイエス様、私の罪のために死んでくださり、ありがとうございます…」のお祈りを毎日読んで、祈っていました。歩くことができなくなってからは、ベッドの上で暗記して祈っていました。ゆっくりとはじまり、最後のアーメンは大きな声で祈りました。三つの薬も何度もいただいていました。声が出なくなってからは私たちが交代で読みました。アーメンの声は小さな声で言いました。そのうち、アーメンは瞬きの合図にかわりました。何度も何度も祈りました。父を囲み、救われた私たち家族が一つになっていきました。少し離れた所に住んでいた妹、佳苗家族も毎週ホスピスにきて、父のそばでみことばを読む恵みにあずかりました。看護士さんもよくその場にいてくださり、ともに聞いてくださいました。点滴薬が追加されるときは、だれかが主にお委ねする祈りを捧げることができ、不安が平安にかわるのでした。寝ているように見えても霊は聞いていると言われましたから、聖書の輪読の恵みもいただきました。「日々の光」を読むたびにみことばが生きて働いているのがわかりました。みことばはイエス様ご自身でした。その度にすべてが完全で主のご計画と確信しました。

四月十七日の夜、召される前夜。

わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。（ヨハネ　12・32）

四月十八日、召された夜。

御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。

（黙示録　7・17）

「天国で待っていてね」と約束をし、首を縦に振って合図してくれました。「お父さんありがとう、すぐに会えるからお父さん安心してね、お母さんのことも祈って、守っていただくからね。イエス様に頼るからね。今までありがとう、イエス様よろしくお願いします」、耳元で何回も伝えました。瞬きで返してくれました。主は優しいお方です。父の病気を通して、父を失うのではなく、父をみことばにより近くにおいてくれる確信をくださいました。私は天国の存在を知っていましたが、父の昇天で天国が引き寄せられました。こんなに天国を近くに感じられるとは思いませんでした。イエス様のしてくださったみわざはこれからもたくさん知ることとなるでしょう。だから、イエス様から目が離せませんし、離してはいけないのです。主は父を一番よい天国へ入れてくださいました。痛みもなく、苦しみもなく、涙もないところです。

私たちが父の手を握って、母が父の首を抱きながら耳元で「お父さんありがとう」と伝えた後、最後の一息、父のゆっくりの安堵の一息を家族で感じました。天に引き上げられた瞬間でした。忘れません。その瞬間光を見ました。柔らかい優しい光で

した。父の顔が明るくなりました。イエス様、ありがとう。お父さんをよろしくお願いします。涙をもって四人で感謝しました。すぐに弟、康弘は、こう祈りました。「イエス様、僕たちの成長の過程にはいろいろなことがありましたが、それはすべて主イエス様によって良いことに変えてくださいましたから、本当にありがとうございます」と、父を囲んで祈っていました。

本当に私たちの家族はイエス様の御手の中でいつも守られてきました。主は生きておられます、父もいま、生きています。私たちは天国へのはしごを昇っています。父の遺言に「前へ向かって進んでください。後ろを見ずに」とあるとおり、天の御国を目指して一日一日を主イエス様に助けていただいて昇っています。悔い改めもたくさんありました。私は母に対して、聖書にこうあるからとか、母の悲しみを知る前にみことばをふりかざして気持ちに寄り添うことができない者でした。追いつめてしまう愛のない娘です。ごめんなさい。その度にあやまりました。

父がホスピスに入院する前、私は自分のしていることがよくわからなくなってしまいました。両親を助けたくてもできずに、いただいている祝福はどこに行ってしまったのか、と苦しくて、ベック兄にお電話をさせていただいたことがありました。

ベック兄は、「イエス様の導きは完全だよ。何があっても祈ろう。私たちが、言うことや、何かをすることではなくて、イエス様しか励ませないよ。人間の言うことは聞きたくないよ。だってね、イエス様は生きているから。なにがあってもイエス様によろしくお願いしますだよ。詩篇の37篇を読むといいよ」と、おっしゃってくださいました。「主イエス様、私は悔い改めます。罪を赦してくださりありがとうございます。どうか両親を助けてください」と祈り、詩篇37篇を読みました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

詩篇を読んで「主が成し遂げてくださる」のみことばにしがみつきました。主は、母をみことばで元気づけて、私たちの前に現れるようにしてくださいました。これからも主が母を元気にしてくださると信じます。

父は、地に落ちて実を結ぶ一粒の麦となりました。弟、康弘は「この一年を通して父のそばで聖書を読んでいた俺は、イエス様に変えていただいた」と、嬉しそうにいってくれました。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。（ヘブル　11・1）

また弟は、「目に見えないものを、信仰によって天国を確信すること。これが与えられた」と、喜んでおります。

父は、自分の葬儀を通してたくさんの方に聖書の福音を伝えてくださいとベック兄にお願いしていました。自分がベック兄の口を通してみことばと主に出会ったように、葬儀に来られる一人ひとりに話してくださいとお願いして召されていきました。主は、この父の最後の願いを聞いてくださっています。当日の参列者にも、また、式に来られなかた方には後日、葬儀の録音ＣＤを差し上げたのですが、主イエス様に出会う方がおられました。

母の幼なじみの友人は三十年前にベック兄と交わり、聖書を持って海外へ行かれましたが、「そのときは聖書を読んでもわからなかったけれど、葬儀のメッセージを聞いて、イエス様のよみがえりが大事であることがわかった」と、いまとても喜んでおられます。視力低下のため、外出が困難ですが、交わりを求めておられます。

父の大学の数名の友人と集会の数名の兄弟が同じ大学出身とわかり、交わりも与えられていました。「ベックさんのメッセージをもっと聞きたい」という方もおられました。葬儀のメッセージを聞いた方で、その後ガンの末期とわかり入院した方も数名おられます。

六月の半ばころ、私の高校時代の友人が突然亡くなりました。その死をきっかけに、死んだらいったいどうなるのかと、仲間の友人にきかれました。天国のメッセージの冊子を差し上げたところ、お嬢さんと読まれたそうです。お嬢さんも「死んだらどうなるの？」と、夜泣いたり不安になっていたそうです。二人で何度も読んだそうです。四年生のお嬢さんは悲しんでいるお母様にこう言いました。「人は死なないんだって。この本

にそう書いてあるよ。人は生きる。死ぬことは終わりではない。イエス様を知ったら天国で生きるって書いてあるよ。だから、悲しまなくていいんだよ。ママ、すごいね、うれしいね！」と、そのお嬢さんはお母様を慰めていました。友人は、「ありがとう。子どもはすぐに信じられるからうらやましい。あの冊子はとても大事なものになりました」と言ってくれました。

高校時代には主を証ししてこなかったことを悔い改めました。主は私の体験したことを話しなさい、と語ってくれています。父が天国にいて、よみがえりの主とともに生きていることを話さないではいられません。人はみな悩み、死を恐れているとわかりました。真実のイエス様を知って、そしてみことばを知って、幸せになってほしいと祈っています。主は生きておられ、いつも導いてくださっています。目に見えないものを確信するたびに、みことばの一つひとつが真実になっていきます。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。（ヨハネ　11・25）

まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。（2サムエル　23・5）

小さいころからイエス様の名前を聞いて成長することができた恵みを感謝しています。私自身のこれからのこと、家族一人ひとりのこれからのこと、関わる周囲、環境のこれから先のこと、何一つわかりません。けれども、私の心の中にはイエス様が住んでいてくださっています。私のすることは、そのとき、そのとき、イエス様にお祈りし、一歩一歩、イエス様の導きに従うことだけです。すべては祈りのうちにイエス様によって導かれると信じています。

神田ゆう子
一九七一年東京都生まれ
東京都立清瀬高等学校卒、富士短期大学経済学部卒
夫・茂樹　長女・恵　長男・誠

こんな私を主は信仰に導いてくださいました

原　八朗



右から長女の朋子さん、八朗さん、万里子さん、次男の正大さんご夫婦

私は一九四七年、島根県安来市で生まれました。男四人、女四人の八人兄弟の末っ子でした。今も八十四歳の姉を筆頭に全員が元気です。しかし、父親は私が二歳の時に心筋梗塞で亡くなり、私だけが父親を知らない、勝手気ままな性格の子どもに育ちました。小学生の頃は、母親は商売で忙しく働いていましたから、参観日などには十九歳離れた長姉が母親代りに来てくれることがよくありました。また、祖母は頼りにしていた長男を早く病気で亡くし、次男、三男も戦争で亡くしたためでしょうか、浄土真宗の仏壇を朝夕拝み、お寺に参り、寄付などもよくしていました。お寺さんとは家族で付き合っていました。

一九六五年、工業高校卒業と同時に電機通信メーカに就職しました。会社では当時、一番の成長が見込まれていたコンピュータ部門に配属され、メンテナンス業務をやることとなり、七ヶ月の厳しい研修の後、名古屋へ配属されました。高度成長期でしたから仕事も繁忙を極め、深夜、休日の出勤は当たり前でした。百時間を超える残業も常態化していました。そんな状況でも、自分たちは最先端の仕事をしている、会社の成長と自己実

現が図れるとの思いで張り合いがあり、残業も苦にならず、むしろ楽しかったです。しかし、ストレスもあり、仕事の後、夜の街に出かけて深夜帰宅することも度々でした。

家内とは三十歳で見合い結婚をしました。家内は、安来とは県境を挟んだ隣町の、鳥取県米子市の生まれでした。名古屋勤務の私は、数回会っただけで結婚式を挙げました。長男、次男、長女と三人の子どもに恵まれ、家庭には何も問題はないと思っていました。しかし、そう思っていたのは私だけのようでした。

その頃は、金融機関に派遣され大型コンピュータシステムを担当していました。前にも増して忙しく、責任も大きくなっていました。早朝出勤、深夜帰宅、休日勤務が普通でしたから、家庭・家族を顧みる余裕はありませんでした。ただ、一生懸命仕事をして、給料をもらい、家族を養えばよいぐらいの考えしか持ち合わせていませんでした。家には寝に帰るだけのような毎日でした。家族との会話も乏しく、一緒に遊びに出かけることなど、ほとんどありませんでした。家庭や子どものことは家内にまかせっきりでした。後に家内から、家庭は完全に崩壊していた、よくても一歩手前であった、と告げられました。

このような崩壊寸前の家庭に、主は福音を伝えてくださいました。きっかけは、吉祥寺集会の兄姉が私たちの住むマンションに引っ越して来られ、家庭集会に家内を誘ってくださったことでした。しばらくして、家内と三人の子どもは兄姉宅のお風呂でベック兄を通して洗礼を受けました。その時、一番歳下の娘、朋子は三歳でした。しかし私は、そのことを知りませんでした。ただ、日曜日で私が家にいる時にも、四人そろって出かけるので、変な宗教に入ったのではないかと気をもんでいました。

しばらく過ぎた正月休みに私が自宅でゴロゴロしていた時、家庭集会を開いている兄弟が見えて、「一度来てみませんか」と誘ってくださいました。少なからず気にかかっていましたから、行ってみることにしました。部屋に入ると多くの兄弟姉妹から歓迎され、ご馳走をいただきながら兄弟姉妹のお話を聞いているうちに、この集団は悪い集まりではなさそうだ、と思いました。先立っていた悪いイメージが消え、家族をこのまま放っておいてもよいと、ひとまず安心して帰宅したことを憶えています。

しかし、このように素晴らしい機会をいただきながら、私には、「自分には神さまは必要でない、神さまなどに頼ることはない、自分でできる」との思いが非常に強くありました。さらに、今は仕事を最優先にしたい、自己実現を図りたいという、気持ちを持っていました。

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

（イザヤ　25・1）

このみことばは、御代田の福音センターで洗礼を受けた時にお祈りくださった兄弟からいただいたものです。その時は聖書の知識もなく、みことばの意味もよくわかりませんでしたから、深く考えもしませんでした。しかし、今では特に後半の「あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました」の箇所が心に響きます。これは主が、イエス様を信じるようになるまで二十年近くもの間、忍耐をもって導いてくださったおかげだ、と感謝しています。

名古屋では家庭集会に一度行っただけでしたが、山陰の松江に転勤した翌年には家族全員で千キロ近い道のりを御代田の福音センターまで導いてくださいました。島根の地では「喜びの集い」も開催してくださいました。このように主との関わりが家族と共に保たれ、絶たれることはありませんでした。また、山口での約四年間は宇部での「喜びの集い」や山口集会に来られた兄弟を空港へ送迎する機会を与えられ、車中での交わりを通して、主イエス様を忘れないようにしてくださいました。四国高松での約四年間でも、高知と高松の「喜びの集い」や坂出での集会を通して、主との関係を留めてくださっていました。

そして主はとうとう私に病気を与えられ、「早く、わたしに帰れ」と催促をしてくださいました。その病気は心臓の逼迫性発作を起こすWPW症候群でした。発作を起こし、救急車で病院に送られることも何度かありました。大好きだったゴルフは完全に取り上げられ、クラブはゴミとして捨てられ、夜の付き合いもセーブを余儀なくされました。こんな状態で仕事の無理も利かず、気分は落ち込み、最低になっていました。

そんな折に転勤の話がありました。行く先は本社の技術管理部門で間接部門でした。私も五十五歳となり、会社人生も残り少なくなっていました。新しい仕事はデスクワークで、現場の顧客しか知らない私には合いそうもなく、不安でした。それ以上に、心臓の病気が気がかりでした。下の子どもは高校三年生でしたから、最低一年間は単身赴任をしなければならず、一人暮らしは食事の問題を含め心配だらけでした。そうしたことを考えると直ぐに返事ができず、少し考える時間をいただきました。私自身が迷う中で主が働かれ、導いてくださったのだと今は確信しています。

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。（ヨシュア　1・9）

結局、単身で赴任しましたが、二十四時間管理された寮に住むことができ、病気の診療も勤務地近くの病院に引き継がれました。この間には、離れた家族ともどもメサイヤコンサートを聴く機会も与えられ、主との繋がりが絶たれることはありませんでした。

一年が過ぎ、私と家内は神奈川県川崎市へ、高校生であった娘は大阪の大学へ、長男、次男はそれぞれ広島、岡山の大学へと、四箇所に別れての生活が始まりました。マイナス面の多い分散家族でしたが、恵みもありました。

○家内は、川崎に来てからは吉祥寺集会に毎週集うことが叶いました。

○心臓の病気も、顧客対応のストレスから解放され、発作も出ず、経過も順調でした。

○私は、土・日が休みとなり、自宅で暇を持て余す時間が増えていました。

ある日曜日、家内が礼拝から帰るなり、山口にいた頃メッセージに来られていた兄弟を憶えているかと聞きますので、憶えているよと答えますと、あの兄弟から「この近くに住んでいるから遊びに来ないか」と誘われたとのこと。懐かしさもあって、私は「いいよ」と返事をしました。そしてある土曜日に訪問しました。交わりの時、聖書の話題もあったのでしょうが、山口で出会った時の話や仕事の話や世間話をした印象しか思い出しません。直ぐに帰る予定でしたが、夕方までお邪魔したように思います。ただ、今でも心に残っているのは、別れ際に兄弟から「来週から吉祥寺に来たらいいじゃない」と言われ、「はい」とも「いいえ」とも言えず、ことばを濁して帰ったことです。

この訪問から二週間くらい経って、家内が一緒に吉祥寺に行こうと熱心に誘いますので、日頃から負い目を感じていた私は、気が進まないまま吉祥寺集会に行きました。会堂は兄弟姉妹であふれ、想像したような教会の静けさはなく、人声と人息で圧倒されそうな雰囲気でした。帰ろうと思ったぐらいでした。集会後には多くの兄弟との交わりも与えられ、食事もご一緒にして帰りました。最初のうちは集うことに抵抗感もありましたが、通うに連れてそれも薄れて、通う回数も増えました。いつも後方の席で拝聴していました。また、「喜びの集い」に家内と出かけることが、苦にならないようになりました。

そして約一年後に、まだ疑問符が付くような信仰状態ではありましたが、主にお任せして洗礼を受けることにしました。二〇〇四年四月十日でした。名古屋で初めて家庭集会に招かれてから約二十年、もう、五十七歳になっていました。その時のみことばは、イザヤ書25章1節でした。このみことばの通り、「主は不思議なご計画で、私が知らない内に時間をかけて忍耐をもって」救いの御業を成し遂げてくださいました。洗礼が終わって「日々の歌」を歌い出す頃にはなぜか涙が出ていました。関わってくださった兄弟姉妹に、また、いつも祈っていてくれた家族にも感謝しています。特に家内は私が信仰に歩むまでの長い間、みことばを信頼して忍耐強く祈り、支え続けてくれたことを心より感謝しています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

これからも主の十字架を仰ぎ見て、主とともに最後まで歩みたいと願っています。

二十年間祈り続けてくれた家内の召天

家内は胃がんを発病して手術を受け、胃を全部切除し、自宅で療養をすることになりました。家内の発病は二〇二一年の二月末頃でした。胸のつかえや吐き気などがあり、素人目で逆流食道炎ではないかと疑って、いつものクリニックで診察を受けて薬をいただき飲んでいましたが、症状はよくなる気配がありませんでした。内視鏡検査で潰瘍と腫瘍が見られ、組織検査の結果、癌の可能性が高いことがわかり、大きな病院を紹介するから再度、診察を受けるよう医師から指示されました。

近くの多摩病院を紹介され、四月はじめに診察を受けました。内視鏡やCTによる画像診断の結果は胃がんでした。担当医師は、抗癌剤で患部を縮小させて胃の切除部分を少なくしたかったようですが、四月中旬には食欲が極端に衰えましたので、手術に備えて体力回復を優先させたいと思い、担当医師に入院を要請しました。そして週明けには入院しました。

数日後、担当医師から、抗癌剤で患部を縮小させてから手術することはあきらめ、すぐに手術をするとの方針が本人と家族に告知されました。

手術は四月二十四日でした。当日は祈り会の姉妹方、兄弟方もわざわざ病院まで来て、祈ってくださいました。本人も平安に手術を受けることができ、私たち家族も平安のうちに結果を待ちました。手術は予定時間より長くなりましたが無事終了しました。

手術後は順調で一週間後に退院し、次の抗癌剤治療に備え、五月二十三日、抗癌剤治療のため再度の入院をしました。投薬治療中は、嘔吐・下痢が激しく、また退院後も自宅での抗癌剤治療の副作用で食事がとれず、見る間に痩せていくのが痛々しい限りでした。

家族で話し合って、本人の体力の限界が見えるので、抗癌剤治療の停止をお願いし、その後は漢方薬などの服用と外来診療を受けることにしました。動揺は少なからずありましたが、平安に受取ることができ、「主イエス様が働いてくださっていた現実」を憶え、心より感謝することができました。家内はこの病を通して、それまでにも増して主を深く知ることができたと思います。また、入院を通して、患者の皆様や病院の方々にも福音を少なからず宣べ伝えることができたことも感謝しています。

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。（ヘブル　2・18、3・1）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

その後、入退院を三回繰り返し、最後の入院となった四回目には肺に水が溜まりましたが、胸水を抜く処置を数回、腹水の処置も合わせて行っていただきました。担当医師からは厳しい状況を示されましたが、家族には元気が回復したように見えていました。本人も自宅治療を目指して、主に祈りながらリハビリに励んでいると言っていました。私たちも点滴など自宅での治療のための訓練を受けました。こうして十一月七日に酸素ボンベを抱え、点滴を繋ぎ、車椅子で退院しました。

自宅に帰り、二十四時間訪問看護、介護を受けながらの生活でしたが、次男が孫二人と帰って来て家族がそろい、十七日の家内の誕生日を前倒しして誕生日会もできました。退院後、十日を過ぎると往診医師の緊急呼び出しが増え、本人も弱気になり、私もなんとも言えない重苦しい時間が多くなっていました。主に祈りながら介護しているのに、肉の思いが勝る状況になっていました。十八日には礼拝をインターネットで見た後、家内は苦しい中で、絶筆となる次のようなメモを書き残しました。

すべてが最善でした
救われた時、日々のうたでは

なかったけれど、中は一緒
召されるまで変わらない
ゆるぎない確信でした。
みなさんにお伝えをして
ローマ書3章23～30節
神は唯一ならばそうです
神は唯一ですべてのすべてです
万里子　終

十九日の夜には医師から家族、関係者を呼ぶように、との話がありました。翌日には息子二人もそれぞれ奈良県、広島県から帰って、子どもたちは母を見守り、祈る毎日となりました。最後の三日間は主が私たち家族の思いを一つにしてくださり、五人が一緒に祈る時を与えてくださったのは主の恵みに他ならない、と感謝しました。二十二日早朝に平安のうちに息を引き取りました。私たち家族は上記のメモを読み、家内は主イエス様を信頼して、天国に旅立ったのだと確信を与えられました。

自宅看護が始まってから多くの兄弟、姉妹のお祈りとお見舞をいただきました。一番身近で信仰の灯台でありました家内がいなくなり寂しくなりましたが、私たち家族は家内が書き残した「神は唯一で、すべてのすべてです」のことばを胸に刻み、最終ゴールの天国を目指して、主を仰ぎ見て信仰の道を歩みたいと思っています。

原　八朗（はら・はちろう）
一九四七年島根県生まれ、安来小、安来第一中、松江工業高校電機通信科卒
富士通株式会社勤務、二〇〇九年定年退職
妻・万里子（二〇二二年十一月二十二日、昇天）
長男・一成、次男・正大、長女・朋子

イエス様のあわれみのまなざし 私のような者でも

国中　千世



夫の利行さんと

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
（1ヨハネ　1・7）

私は、東北岩手県三陸沿岸の小さな村で育ちました。貧乏人の子だくさんで、父は大酒のみ、母は働き者で明るい性格、おかげで子どもたちは貧しいという自覚もなく、元気に過ごしていました。早く大人になり、給料をもらえるようになりたいと思っていました。十八歳で東京に出て働いている時、職場の先輩の紹介で主人と知り合い、二年後に結婚し、三人の子どもを与えられました。

その頃東京は、オリンピックで盛り上がっていました。主人は、自営業でした。商品を造って問屋に納める仕事でした。時代はバブルで、次から次と注文に追われながら二年ほどで家を建て、東村山に住むことになりました。長女が生まれて約半年後、経済的にも少し余裕ができた頃から、主人の寄り道人生に、私は苦しむことになりました。マルチ商法、先物買い、セミナー、海外での女遊び。お金がなくなると戻り、仕事

をし、またお金を持ってフラフラいなくなり、しばらくして戻る。そんな生活が、長男が高校生になる頃まで続きました。三人の子どもの前で私は悲しみをこらえ、明るく元気な母親を演じていました。隣に住んでいる主人の両親の手前もあったと思います。長男が成人した年に、主人は入間市に家を建てると言い出しました。私は気が進みませんでした。主人の母も行かないでほしいと泣いて頼みましたが、実行に移されました。

新しい家ができ上がり、一九八九年に移りました。とても立派な分不相応な家でした。多額のローンをかかえての新しい土地でのスタートでした。世の中はバブルがはじけ、銀行の取り立てもきびしくなり、仕事の注文も減り、資金繰りも大変な時、今度は中国に会社を作ると言い始めました。家族の反対も振り切り、同業者数人で始めました。「これが最後だから、男のロマンなんだよ」と言って中国に何度も通う日が続きました。

その頃は、長男は結婚し、長女、次女とも社会人になっていました。中国の仕事は三年目近くで駄目になり、銀行の返済も滞り、家を競売にと言われ、家を売るしか方法がなくなりました。全部清算しても返しきれず、中古の家に移っても、またローンをかかえました。主人はすっかり落ち込んで、テレビの前にボーと座っている毎日でした。魂の抜けたその姿は、ただの物体でした。それでも、「そのうち立ちあがる」と信じなくてはと思って、待ちました。

二月の確定申告の時期に、結婚して初めて事務所の書類を調べ始めました。次から次と信じられないことが発覚しました。ありとあらゆる所から借金していました。一番ショックだったのは、弟から一千二百万円も借りていたことと、老後のため保険会社に用意していた私の個人年金も全部使って解約になっていたことでした。

借金の総額は八千万円にもなり、忍耐だけがとりえの私も、この金額には堪忍袋（かんにんぶくろ）の緒（お）が切れました。毎日が主人との戦いでした。どう乗り切るか、話しかけても何の返答もなく、声すら出さず、そんな主人相手に泣いたり怒ったり、私の口からは悪いものばかり出て、それを止められず、自分が壊れていくのがわかりました。主人を裁く思いに支配され、一歩も身動きができなくなっていました。真っ暗闇の中に置かれました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
（詩篇　119・71）

そんなある日、幼馴染（おさななじ）みの横浜の村上ヤスエさんから電話があり、吉祥寺集会所で会うことになり、ベックさんとお会いする時をいただきました。一九九八年六月十一日（火）のことでした。その日、私は何もお話しすることができませんでしたが、ベックさんの後について生まれて初めてお祈りをしました。涙がとめどもなく流れて、泣きながら帰りました。帰り際にベックさんから三冊の本をいただきました。私の中で何かが変わりました。主人も、問題もそのままなのに、この感覚は何だろうと思いました。それからは毎週、吉祥寺集会に通いました。みことばをむさぼり食べる日々でした。イエス様のことをもっともっと知りたいと思いました。集会の本もほとんど読みました。姉妹方にいただいた録音テープのメッセージ、証しにも夢中になりました。私はだんだん主の豊かな愛と恵みに満たされていきました。

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。
（マタイ　5・4）

日々の生活にも平安が与えられ、イエス様を思う時、心配事は消え、希望を持てました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。（ヨハネ 14・27）

聖書を持たずに集っていた私は、辻田姉妹から聖書をいただき、生まれて初めて手にしました。信仰とは無縁の人生を過ごしてきた私には似合わない書物と思いましたが、今では

大切な宝箱です。私に必要なすべてがその中にあるからです。本当にすごいことです。こんな私でさえ、心から求めれば、主は何でも与えてくださいます。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。（マタイ　6・34）

主人とイエス様との出会いは全く予期しないものでした。主人は、二〇〇六年から在宅介護となり、二〇〇九年に老人ホームでの生活になりました。この介護生活に入る前の三年ほど、主人は知り合いのご夫婦と家庭集会に何度か集い、ベックさんともお交わりの時が与えられ、イエス様の救いを知って喜び、メサイアコンサートにも行っていたのです。しかし、私自身は、主人からは何も聞かされず、そのことを知ったのは、だいぶ後になってでした。上福岡の集会に参加した時、知り合いのご夫婦に連れられて来ていた主人と鉢合わせしたのです。私は、なぜ主人がそこにいるのか理解できず、取り乱してしまいました。当時、まだ主人を赦せなかった私は、主人を集会に導き出すようなことをなさるイエス様は、もう信じることができない、とまで口にするほどでした。

老人ホームでの生活になってからもベックさんは気にかけてくださり、「ご主人、元気？」とか「一緒に祈らないとダメだよ」とか言ってくださいました。ベックさんとお交わりした時、主人は、自分勝手で罪深い者だったと涙を流し、祈ったことなども話してくださいました。なのに、私は一緒に祈れませんでした。

二〇一二年六月八日、肺炎になり、主人は入院となりました。二週間ほどで肺炎は治ったのですが回復がみられず、調べた結果、多系統萎縮病という難病であることが分かり、それも、かなり進んでいました。レントゲン写真で、小脳がやせて小さくなっている、との説明がありました。その写真で、脳の上の方に白い十字架のような形が浮かんでいるのを目にした時、これはイエス様のしるしだ、なぜ神様のしるしが主人に、

と思いました。でもすぐに思いました。私が、イエス様のもとに主人が来ることを喜ばなかったり、一緒にお祈りもしなかったから、イエス様は、主人をより愛されたのだと。そして、いつまでも主人を許すことができないでいる自分の愛のなさ、不信仰を思い知らされて、悔い改めました。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。（詩篇　139・1～3）

二〇一二年十一月十八日（日）、いつもの時間に主人の病室に入り、いつものように声かけし、（一方的に）良い天気であること、娘や孫たちも来ることなど話し、十分ほどした時、先生や看護士さんが急いで来られて、息をひきとったと告げられました。私がずっといたのに生と死の境目が分からないほど安らかで、静かで気持ち良さそうな寝顔でした。

平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。（詩篇　4・8）

主人が目の前で息を引きとったのに、悲しみもなく、ただ圧倒されていました。主のご計画は何とすてきなんだと、主人がうらやましくさえ思いました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

子どもたちが来るまでに処置をしていただくことになり、主人の背とマットの間に手を入れ、体温を感じながら、感謝のお祈りをしました。看護士さんが様子を見に入って来ました。入口の所で、「あらっ」と小さな声を上げました。ベッドに

近づき、「オレンジ色に見えた気がしたから」と言われたので、私が「イエス様です」と言ったら、不思議そうな表情で主人の顔をのぞき、「良いお顔ですね」と言って出て行かれました。イエス様がいらっしゃると心から思い、喜びました。

その後、火葬、葬儀を、ともに集会の方々の最善の助けをそなえてくださり、すべてを整えてくださいました。葬儀に集ってくださった親族、友人、知人は未信者ばかりでした。葬儀では、ベック兄が愛するイエス様のこと、十字架のあがないによって罪がゆるされていること、死は終わりではないこと、天国のことなどをお話しくださり、何よりの感謝と喜びでした。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ　3・20）

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。（1ヨハネ　5・3）

国中千世／一九四三年生まれ。
岩手県下閉伊郡普代村、十八才で上京。一九六六年結婚。
国中利行／一九四〇年生まれ。
二〇二一年十一月十八日召天。

イエス様は私をしっかりと受け止めてくださいます

松尾　寛子



ミンヘンさんと熊本キャンプで

私は福岡県で生まれ、五歳で千葉県に引っ越し、二十歳で再び福岡に戻りました。初めてイエス様に出会ったのは十九歳の時、高校の同級生に誘われて参加した御代田のバイブルキャンプでした。まだ「バイブルキャンプ」という言葉を知らなかったので、バーベキューをしたりするのだと思い、楽しみにして行って、戸惑いました。いたるところで「イエス様」という言葉を聞き、皆さんがイエス・キリストを信じていたからです。

たくさんの兄弟姉妹を紹介されましたが、印象深かったのは姉妹たちの顔がきれいで、輝いていたことです。それから何度か吉祥寺の日曜礼拝に行き、池袋のメサイアコンサートにも誘っていただきました。当時の母はパニック障害で、電車で出かけることは大変でしたが、一緒に行かせていただきました。

初めて御代田キャンプに行ってから、頭の中が混乱し始めました。自宅に仏壇はないのですが両親の実家に行くと線香をあげ、手を合わせるのを当然としていて、仏が神で、お寺に神様がいると信じていたからです。それで「私には仏とイエス・キリストの二人の神様が特別にいてくれているのだ」と勝手な理

由づけをしていましたが、すっきりしませんでした。この状態で福岡へ引っ越しました。福岡にも集会があると聞きましたが集う気にはならず、ただ福岡でのバイブルキャンプに誘われて行くだけでした。「何でもお祈りするといいよ」と聞いていましたので、何かで緊張した時には「イエス様、助けてください」と小さな声で祈っていました。イエス様はこの祈りを聞かれ、心が安らかになることをはっきりと体験しました。真実を知りたいと願うなか、次のみことばが与えられました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（マタイ　7・7～8）

「だれであれ」とあるので、私は「イエス様、あなたが本物ならば私に教えてください。イエス様を捜しています。教えてください」と、心から祈りました。でも、しばらくの間は何も起こらず、自分の楽しさを求める日常へと戻っていきました。この祈りが答えられたのは二十六歳の時、当時お付き合いしていた男性への自分の気持ちの変化がきっかけでした。私はその男性がとても好きで、結婚したいと熱望していましたが、年月が経つと冷めていき、熱い気持ちはまったくなくなり、自分の感情の起伏がこわくなりました。

かつて、福音を伝えてくれた友人が「自分にはまったく愛がない」と言っていたことを思い出しました。それを聞いた時は意味がわかりませんでしたが、この時になって、「愛がないとはどういうことなのか。私もその通りではないか」と思い、思い切って御代田のバイブルキャンプに参加しました。

そのキャンプで、主は私の心の目を開かれ、生まれかわる体験をしました。はっきりと「イエス様を信じます」と告白できるようになりました。

それまでは「イエス様を信じるとお線香あげられないし、そうすると何かと面倒だ。大衆の中に紛れていたい」と心のどこかで思っていたのですが、それが「偶像礼拝はできない」という思いに変えられました。私が無理して、努力してそう思い込もうとしたのでもなく、洗脳されたのでもありません。イエス様が私を救ってくださったのです。その時、兄弟姉妹のたくさんの祈りがあったのだとわかり、感謝の気持ちでいっぱいでした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

信仰生活が始まったばかりで、喜びしかなく、罪のこともわからなかった時に、両親にイエス様を信じていること、これからは仏壇で線香をあげられないことを伝えました。それ以来、父は私が集会に行くことを嫌がり、責め、私も言い返していました。「なぜ私ばかり責められるのか。私は正しい」。そのような態度をとっていた私に、主は突然光を当て、「悪いのは寛子の方だよ」と気づかせてくださいました。

まさか自分が悪いとは思ってもいなかった中で、イエス様のあわれみでした。ある時、母から「あんたはお父さんをどれだけ傷つけたか、わかってるの？そんなこと言うなら家を出ていきなさい。もう親でも子でもない」と言われ、ただ「はい」と答えました。それから毎週日曜日は小さくなって礼拝に行き、帰りは「どんな状態になっても、余計なことをしませんように」と祈ってからしか家に入れなくなりました。

二〇一一年五月の福岡キャンプで洗礼を受ける恵みが与えられました。しかしその時の私には「毎週の礼拝に集えているのに、これ以上両親との間に波風を立てたくない」という気持ちがありました。両親の反応がこわくて、洗礼を受けたくないという思いもありましたが、イエス様の計画ではその日は洗礼の日だと刻まれていたことが、御霊の強い導きでわかっていました。家を出される覚悟で手紙を書きました。内容は「私は救い主であられるイエス・キリストを信じていて、これからも聖書に従って歩んでいきます。愛のない言葉でお父さん、お母さんを傷つけてごめんなさい。五月二十一日に洗礼を受けますので来てください」というもので、両親に謝ることができ、イエス様に感謝でした。

私は盲目で、イエス様が教えてくださらなければ何もわからない者だ、と知らされました。当日、家族は来ませんでした

自分の幸せを第一とし、わがままで惨めな私に、主は賛美することを与えてくださいました。主を賛美する時、自分の姿を見せられ、悔い改めへと導かれます。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

（ルカ　23・34）

以前私は、自分は特別悪いこともしていないし、いい子だと思っていましたから、十字架上のイエス様の祈りは私にかかわるものではないと思っていましたが、イエス様は私のために祈ってくださっていたのです。イエス様は私に御霊を与えてくださいました。今、私はイエス様を信じ、永遠のいのちを持っています。疑ったり、抵抗したりしましたが、イエス様から離れることはできません。

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

（ヨハネ　1・5）

が、兄は、何か私の大事な日らしいと感じて、来ようとしてくれていました。

あなたは、はいるときも祝福され、出て行くときにも祝福される。

（申命記　28・6）

それから何度か両親、特に父から諭すように「宗教は良くない」と聞かされ、「次が最後だ」と言われています。「次、このような話の場がもたれる時は松尾家を出て行ってもらう」と。私以上に苦しんでいる父の姿、その原因が私の信仰にあることを思い、何度も「もうイエス様から逃げたい」、「永遠のいのちより、今の幸せがほしい」、「自分が楽になりたい。これ以上両親を苦しめたくないからイエス様より家族をとりたい」、「イエス様を知らなければよかった」…とイエス様に告白しました。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル13・5）

二〇二年十月に介護の仕事を腰痛のため退職しました。イエス様はこれからどのように私を運んでくださるのか、何を用意されているのか本当に楽しみにしています。すべての背後に主イエス様と兄弟姉妹の祈りがありました。私は兄弟姉妹の熱い祈りに支えられてきました。

同じ十月に、福岡で福音を宣べ伝えるためのコンサートが開かれ、友人たちが来てくださいました。今、聖書を読んでいるそうです。蒔かれたみことばが実りとなりますように。

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

（詩篇　4・7～8）

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ　5・5）

松尾寛子
一九八二年福岡県筑紫野市で生まれる
習志野市立藤崎小学校、習志野市立第五中学校、習志野市立習志野高等学校、植草学園短期大学地域介護福祉科卒業

科学と常識から聖書の真理へ

会沢　道広



妻の美世子さんと

私は東京の千住という下町に生まれました。父の病もあり、貧しい家庭に育ちました。父は戦時中ヤミ市で憲兵に連行され拷問（ごうもん）を受け、意識の無いまま戸板に載せられ家に帰ってきました。かろうじて命は取り留めたものの、その時の拷問が原因で、体はがたがたになってしまいました。片方の耳は鼓膜が破れ聴力を完全に失い、残った耳の聴力も次第に衰えていきました。治療費もかさみ、母は三人の子どもを一人で養うため朝早くから夜遅くまで働き続けました。

そんな環境の中で育った私は「人には頼れない、人は自分一人で生きていかなければならない」と強く思うようになりました。それゆえ神に頼る人々、宗教を信じる人々を嫌悪していました。なぜ助けにもならない神に助けを求めるのか、神など、しょせん人間が作り出したもので、まったく頼りにならない、と考えていました。自分で努力することなしに神に頼る生き方をしている人々を軽蔑（けいべつ）していました。

父は聴力の衰えとともに妄想を抱き、昼夜の区別もままならなくなり、徐々に精神が破たんしていきました。精神病院への通院から、鉄格子の病棟へと強制入院させられ、自ら命を絶ちました。私が十六歳の時であったかと思います。私は、家庭の貧しさも暗さもすべて父に起因していると思い、父を憎んでいました。父の死の知らせを聞いた時、悲しみ、寂しさを感じることは、まったくありませんでした。父の深い悲しみ、孤独を思いやることはできませんでした。

しばらくして、英会話を無料で教えてくれるキャンプの話を聞き参加しました。そのキャンプは私の嫌う宗教、キリスト教組織の主催でした。クリスチャンに反発を抱く私はカウンセラーと称する世話係の人たちに聖書にある非科学的な記述を指摘しては、答えに窮する姿に気をよくしていました。しかし、自然科学者であった牧師に、彼の質問に答えられないときは教会に行くと約束してしまい、教会に通う羽目になりました。こうして教会に通うことになりましたが、十字架にかけられ、自分自身を救うことのできない者を神の御子として心に受け入れることはできませんでした。そんな者に、助けを求め、祈ることはナンセンスだと思っていました。

そのようにして長い間教会に通っていましたが、一人斜（しゃ）に構えている自分自身に嫌気がさし、洗礼を受けました。洗礼を受けクリスチャンになった以上、立派なクリスチャンを目指し努力しました。しかし、立派な人になるべく頑張れば頑張るほど、外見とまったく異なる偽善そのものの自分の姿がありました。心の中にある自分のみにくさ、ずるさ、いやらしさ、愚かさを徹底的に示され、情けなくみじめになりました。自分の努力不足が原因であると思い、さらなる努力を自分に強いましたが、結果はますます悪くなり、どんどんつらく苦しくなっていきました。時は容赦なく過ぎていくのに一向に進歩のない、改善することのない自分の姿に挫折（ざせつ）と焦燥（しょうそう）感を覚えるようになりました。地上での残された時間は有限であり、一日、一日、命は短くなっていくのに、どうしたら自分の思い描いたような、満足のいく幸せな人生を送ることができるのか。何を得れば、何をすれば、「これでいいのだ」と思える日がやって来るのか。まったく希望を見いだせない自分がありました。悶々（もんもん）と過ごす日々が続きました。やがて強い焦燥感に苛（さいな）まれるようになり、眠れない日々が続きました。睡眠

不足から頭痛に、そして胃の痛みに悩むようになり、頭痛薬と胃薬が常備薬になっていきました。何を食べても美味しいと思えず、食事に誘われることが苦痛になっていきました。

結局、自分はどんなに努力してもりっぱな人間になれない。この世には本当の幸せは存在しない。いつしかこうしたことを悟りのごとく確信するようになりました。教会へ行く必要性もなくなり、十八年に及ぶ教会生活に見切りをつけました。

「幸せ」とは相対的なものであり、富であれ、地位であれ、健康であれ、他人より少しでも優位性があればそれを幸せと呼ぶのであって、絶対的な幸せは存在しないと結論づけました。幸せは瞬間的なもの、快楽と同じようなもの。人はそれぞれ、現在の状況を他人と比較し、優位なことに満足し、幸せであると思い込むこと。これがすなわち幸せであり、やがて、地上での命を終える。それが人間の一生であり、人生である。このような虚無的な思いの中で、淡々と日々を過ごしていました。

そんな時、以前同じ教会に通っていた友人が我が家を訪れてくれました。教会を出たことを伝えると、集会へ一緒に行こうと強く誘われました。どこへ行っても人の集まるところに本当の幸せなど存在しないと思っていましたが、長い間誘い続けてくれていたそれまでの恩義に報いたいという思いがあって、一度だけ集会に足を運ぶ約束をしました。

集会は軽井沢で行われていました。多くの人々が集い、みんなにこにこしており、優しく握手を求められ、多少の戸惑いとうれしさを覚えました。しかし、みんなが「主は生きておられる」などと、すべての事を断定的に表現する態度には傲慢(ごうまん)さを覚えました。また、なぜそんなに喜んでいるのか、何がそんなに楽しいのかまったく理解できませんでした。しかし、何か惹(ひ)かれるものがあり、続けて三回参加しました。

「教会生活で十八年間も無駄にしたのだから、もう少し無駄をしてみては」との変な誘われ方に納得し、しばらく集うことにしました。

やがて、自分の心境に変化が訪れました。教会時代は、聖書を数ある書物の中の一冊と考えていました。それゆえ聖書の中に書かれている、非科学的な、矛盾しているところはすべて無視していました。たとえばノアの箱舟の記事は昔話程度に理解していました。しかし集会に集っているうちに、いつしか聖書は神の言葉であり、すべてが真実であることを疑えない者となっていきました。かつては目に見える現実、理解できること、科学的に証明できること、常識、それらこそすべてだと考えていたのですが、聖書の言葉は理解を超えていても疑う必要のないものであり、聖書の約束はすべて確実なものであり、聖書の記述はあらゆるすべてのものに優先することを確信するようになっていきました。

具体的にはそれは、すなわち次の四つに集約されます。

一つ目は、人は神によって創造されたこと

自分も神によって母の胎内で形造られたこと。決して、偶然、私が存在しているのではなく神の計画によって今、自分が存在していること。

二つ目は、人は愛されていること

自分自身は、愚かであり、情けないみじめな者であることは、全く否定できないにもかかわらず、そのような自分を、主は愛し続けてくださっていること。自分が主の愛の対象であること。

三つ目は、人の罪は赦されていること

自分がどんなに罪深いか、過去、数々の罪を犯し、これからも罪を犯し続ける者でありながら、生涯犯す自分の罪がキリストの十字架によって、すべて赦されていること。

四つ目は、人は永遠のいのちが与えられていること

イエスキリストを信じる者、自分のような者にも永遠のいのちが与えられていること。

永遠がどんなものかもわからない者が、とても理解できない、信じられないことを信じる者へと変えられていきました。いつしか心の中にふつふつとした喜びがあふれてきました。過去、経験したことのない気持ち、これが聖書の中に書かれている平安というものであることが、あとでわかりました。それ以来、本当の平安なしに生きることが、どんなに辛いことであるかも体験を通して知ることができました。自分が生きているのではなく、主によって生かされていることも教えられました。肩の荷が下り、あたかも母の胎内にいるような安心感、平安を体験することができました。いつの間にか焦燥感からも解放され、ゆっく

り眠ることができました。また常備薬であった頭痛薬、胃薬も必要なくなっていました。

見えること、理解できることがすべてなのではなく、聖書に書かれていることが事実であり、本当の真理はすべて聖書の中に書かれていると、心から信じる者へと変えられていきました。聖書の中に、主ご自身が私を選んだと書かれています。信じられないこと、理解できないことも信じている今の自分は、まさに、主が私を選び、聖書を信じる者としてくださったと確信しています。今でも、目に見える現実に支配されやすく、悩んだり落ち込んだりすることの多い者ですが、聖書に戻れば、再び聖書の真理に立ち返り、平安を取り戻すことができます。

主を心から信じる者へと変えられ二十数年たちますが、いまも自分の望むような人間になることはできず、愚(おろ)かであり、情けない、みじめな者であることに変わりはありません。しかし、そんな私を、主が愛してくださっている事実に心から感謝しています。これからも、こんな私を愛し続けてくださる主に、依り頼みながら歩んでいきたく願っています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

会沢道広
一九五三年　東京都足立区千住生まれ
東京都立航空高専卒
現在　三愛プラント工業㈱勤務

イエス様はそばにいて、私の前を歩んでくださいます

会沢　美世子



前列左が美世子さん、灯さんの結婚式にてご家族と共に

私は二〇二年八月に悪性リンパ腫という病を与えられました。これまで大きな病気をしたこともなく、プールで泳いだり、少しの運動もしていましたから健康だと思っていました。突然のことで非常に驚きました。朝、歯を磨いていた時に出血があり、近くの耳鼻科の医院に行きました。右の扁桃腺が喉の三分の二をふさぐくらい大きくふくれていました。毎日食事は美味しく、しっかり食べていましたし、飲み込みづらいとも感じなかったので、口の中をのぞくこともしていませんでした。

医師の判断ですぐに国立病院に回され、検査の結果、悪性リンパ腫であることがわかりました。主人と四人の娘たちと共に医師の説明を受けました。診断の結果、喉以外にも複数の腫瘍があると聞かされた時は、ドキッとしましたが、比較的冷静であったように思います。家族もそれぞれの思いを心に秘めながら明るく接してくれました。

しかし、その夜から一週間、眠れない、食べられない生活が始まりました。真っ暗な奥深いところ。暗黒の中でのたった一人だけの孤独。言葉に言い表せない感覚でした。両親や姉が召天し

ていましたので、天国に行くことに不安はなかったのですが、主人や子どもたちを残していくことの不憫（ふびん）さ、辛さ、そして私のいない生活のひとつひとつのことを思うと胸が張り裂けそうで、涙も流しました。そんな中で助けを叫び求めたのは愛する主人や家族ではなくイエス様でした。「イエス様、助けてください！」、ただそれだけでした。必死で祈り、叫び続けました。初めて死と向かい合った時でした。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。（申命記　31・8）

この聖書のみことばがスッーと心の中に入ってきました。「イエス様がそばにいてくださり、私の前を歩んでくださるのなら、いいかー」と素直に思えました。そして、私のことを心配してくださるイエス様なら、残していく家族の面倒も見てくださるはずと思えて、なんだか、ほっとしました。

イエス様を信じる友人たちが、毎日、毎日、代わる代わる電話をかけてきてくださいました。病気であることも忘れ、会話も弾み、本当にうれしく喜んでいました。子どもたちが、「笑うことはガンにいい」と、落語などのビデオを借りてきてくれましたが、普段なら笑えるビデオがおもしろくありません。しかし家族や電話をくださる友人たち、そして家にお見舞いに来てくださる方々とイエス様の話をしている時は心から笑え、楽しいのです。

そんな日々の中、不思議なことに、いつの間にか喉にあった腫瘍が消えていました。娘の結婚式を十月に控え、抗がん剤治療のための入院の予約は三回も変更していただきました。その後、悪性リンパ腫の種類を特定できないまま、半年間検査し続けました。その結果、年単位でゆっくり進むタイプであることがわかり抗がん剤治療も入院もキャンセルになりました。

九月の健診でも、十二指腸、胆のう、背骨の裏、その他複数ある腫瘍ですが、一年前と数も大きさもほとんど変化がありません。今は食事に気を配り、少しの運動をすることを心がけています。定期的に検査は受けつつ、抗がん剤治療はせずに普通の生活を送らせていただいています。病を与えられ、たくさんの検

査を受けてみて、日々の営みがどんなにすばらしく、ありがたいものかを痛感させられています。

私は今までなんでも当たり前にして生きてきました。明日は必ず来ると思っていましたし、美味しく食べられること、ここちよく眠ることなど、何でも当たり前と思ってきました。しかし、悪性リンパ腫であることを告げられてからは、美味しく食べることも、眠ることも当たり前のことではなく、また自分でコントロールできるものでもありませんでした。命も健康もすべてのものが神様から与えられていることがわかりました。

聖書のみことばです。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。（詩篇　139・13、15～16）

私をお造りになった神様は私のすべてをご存知で、生きて働いてくださっています。必要に応じてすべてを与え、要らないものは取り除かれます。イエス様は私の生活の中のすべてのこと、本当に小さなことまでも配慮してくださり、感謝です。

今は、一日、一日がとても大切です。朝、目覚めた時、新しい一日が与えられたことと、前夜の眠りを感謝せずにはいられません。健康は失いましたが、今まで見えていなかったものをたくさん見させていただくことができました。

私は十八歳の時に教会に通うようになりました。良い人間になれると思い頑張りました。しかし、努力しても良い人間にはなれず、努力すればするほど苦しみ、疲れ果て、迷いに迷った末に教会生活に終止符を打ちました。その後、聖書のみことばだけが中心のキリスト集会に導かれました。このようにして、折に触れて、喜びも、悲しみも、苦しみもありましたが、いつも、聖書のみことばと共にいることができました。聖書のみことばはいつも私を助け、導き、守り、優しく支えてくれました。信仰は頭で理解するものではなく、みことばと共に生活し、生きて

ゆくことだと教えていただきました。

今、私たち家族は福岡、千葉、そして中国と離れ離れで生活しています。離れていても同じイエス様を見上げ、ひとつ心で祈り合える幸せを心から感謝しています。崖っぷちに立たされたとき、助けてくださいと心から叫び求めることのできる対象がある、ということは大きな安心であり、慰めであり、励ましです。地上の生活がいつまでなのかはわかりませんが、これからも一日、一日を大切にして、イエス様と共に喜びながら、感謝しながら、日々過ごしていきたいと願っています。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。

（イザヤ　43・4、7）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23・1～4、6）

会沢美世子
一九五三年　新潟県上越市生まれ
新潟県立北城高校卒
夫・道広　長女・希美　次女・翼　三女・灯　四女・賛美

イエス様は決して捨てないお方です

室田　恵子



右からあさこさん、夫の勝美さん、恵子さん、美星さんと実結ちゃん、流さん、ご家族に囲まれて

わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

（詩篇　40・5）

二〇二一年六月のある朝のことでした。自転車で通勤途中、後ろから走って来た自転車に追い越されて、接触し、バランスを崩して、そのまま車道に倒れ、倒れた直後、車にぶつかりました。すぐには痛みを感じませんでした。起き上がろうとしましたが、足が動かず、動かそうとしてもまったく駄目でした。

大変なことが起きてしまったと思いました。どんどん痛みは強くなり、呼吸が苦しくなってきました。イエス様の名をずっと呼んでいました。もしかしたらこのまま召されるのかも知れない、天国に行けるのかもしれない、とも思いました。

救急車のなかで、イエス様の十字架を思いました。イエス様の痛みはきっとこんなものではなくて、考えられないほど苦しかったに違いない、と思いました。酸素マスクがつけられて、呼吸が楽

になり、思い出しました。最近何度も聞いていた言葉です。「心配しなくていい、思い煩わなくていい、恐れなくていい」

「ああ、そうだ。心配しなくていいんだ」そう思えたとき、ほっとして気持ちがとても楽になりました。あとから知らされましたが、接触した車は四トンぐらいのトラックで、私は倒れるときに「あ！」と大きな声を出したらしく、トラックの運転手さんは、その声で、とっさにハンドルを右に切ってくれたそうです。それで車にひかれることなく、トラックの後輪が左側の腰の下あたりにぶつかりました。後日、運転手さんが病院にお見舞いに来てくださったとき、「あのとき、『あっ！』と言ったでしょ。あの声がなかったら、どうなっていたかわからなかったよ」と仰っていました。声を出したことは覚えていません。イエス様のみわざだと思いました。

病院に運ばれてから、つねに声をかけられながら、検査があり、内出血を止める処置や、いろいろな治療が行なわれました。体を動かすたびに、それまで体験したことのない激痛が襲いました。「イエス様、いつまでですか」と、心のなかで言っていました。ずっと意識がありましたが、詳しいことはわからないままでした。どのくらいの時間が経過したかわかりませんが、「ご家族の方に会えますよ」と言う声が聞こえ、目を開けると、主人と三人の子どもたちがいました。皆笑顔でした。主人が先生に聞いていました。「もう、命に別状ありませんか？」

「まだ、なんとも言えません」。その言葉に驚きました。かなりの量の内出血があり、骨盤骨折と、その他にも、背骨などが何か所か折れていました。主人は言いました。「兄弟姉妹がみんな来てくれてるよ。みんな祈ってくれてるよ。待合室が集会みたいだよ」。自分がそんなに重症だとは思ってもいませんでした。兄弟姉妹方からみことばがたくさん届けられました。

主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
（詩篇　16・8）

入院したときからずっと病室の壁にかけてあったみことばです。毎日読んでいました。骨盤をもとの位置に戻すために、左足を四キロの重りで牽引しましたが、戻らないので、重りが八キロに増えました。呼吸するのも苦しく、呼吸機能を回復させるための器具を使って呼吸の練習を毎日していました。

体を動かせない、食事ができない、眠れない日が続き、自分で自分のことを何もできませんでした。ふだん意識することもなく、普通にできていたことが、このような状態になってみて、食べることも、眠ることも、呼吸をすることも、自分の力では何一つできなくて、すべてが神様の憐みなのだと知りました。

強い痛み止めの点滴をしていましたが、肝臓の数値があがり、また麻薬指定の痛み止めはくせになる、という理由で、痛み止めを一旦止められたときもあり、その夜は痛みで眠れず苦しみました。イエス様の十字架を思い出しました。

イエス様は、罪のかたまりとされて、十字架につかれて苦しまれて、そのうえ父なる神様からも捨てられてしまった。私は、どんなに痛くても、決して捨てられることはない。イエス様はすべてを知っておられて、いつも共にいてくださって、共に苦しんでくださる。そう思えました。それだけで十分でした。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。
（ヘブル　13・5）

次の日の朝、あまりの痛みに、痛み止めの点滴を再開してもらい、約一ヶ月続きました。少しずつ食事もできるようになり、短時間ですが眠れるようになりました。ときどき痛みはありましたが、毎日平安に過ごせたのは、兄弟姉妹のお祈りのおかげだと思いました。祈られていることを実感しました。神さまの家族とされていることを心から感謝しました。

骨盤を固定するための手術が予定されていましたが、高熱が続き、炎症反応が出ていて、この状態で手術をすることは危険だということで、手術日の前日に中止になりました。手術中止はとてもショックでした。このままさらに牽引を続けて骨が自然につくのを待つということで、寝たきりの状態が続くことを受け入れるのに少し時間がかかりました。このこともきっと意味があるのだ、わからないけれどこれが最善なのだと、やっと思えました。

集中治療室に約二週間、その後一般病棟に移りました。神経にも内臓にも何の支障もありませんでした。イエス様の守りでした。牽引が取れて、安静期間が終わり、体を少しずつ動かす訓練が始まりました。主治医の先生は、「三ヶ月もすれば元通りの生活ができますよ」と言ってくださっていたので、すぐに立って歩けるようになると思っていました。

しかし、予想以上に体力も筋力も低下していて愕（がく）然としました。起き上がって、自分の首を支えていられない。首を動かすことができない、三十分以上座っていられませんでした。「本当に歩けるようになるのかな?」と、急に不安になりました。

入院して初めて、自分の体が悲しくなりました。「よくなりたい。早く家に帰りたい。普通の生活がしたい」。布団をかぶって子どものように泣きました。みじめな自分の姿を見せられました。私はこんな者です。そのとき、みことばが聞こえてきました。「わが子よ」。すぐに聖書を開いて読みました。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主にこのみことばに慰められ、支えられました。

責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。……すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。

（ヘブル　12・5〜7、11〜12）

神様の愛そのものでした。子として扱ってくださっている。嬉しくて、嬉しくて、喜びの涙に変わりました。イエス様、ありがとうございます。感謝でいっぱいになりました。私は幸せ者だと心から思えました。それからは焦（あせ）ることもなく、イエス様にお委ねすることができました。

リハビリが始まり、リハビリの先生は毎日ていねいに、かつ厳しく、私の体調に合わせて指導してくださいました。まったく動かせなかった左足が動くようになりました。車椅子、歩行器、松葉杖と進み、リハビリを始めてから一ヶ月ほどで、杖一本で歩けるようにまでなりました。

自転車でぶつかった高校生の女の子は、ご両親と一緒にお見舞いに来てくださって、本や聖書を受け取ってくださいました。とても自分を責めている様子でしたので、一日も早くイエス様に重荷を降ろすことができますように願っています。

また、入院中に私の父と主人の母が北海道から来てくれました。吉祥寺の集会にも行くことができて、多くの兄弟姉妹の方々とお会いすることができ、これも事故のおかげと思い、感謝しました。三ヶ月ほどの入院生活中、多くのみことばの種が蒔かれたことも感謝します。蒔かれたみことばの種が芽を出して多くの魂が救われますように祈っています。

退院後も一年くらいは外来で様子を見ていただく予定でしたが、先月の診察で、順調に回復していて、これで終わりにしましょう、と言われ、通院も終わりました。仕事にも少しずつ行かせてもらっています。

どうしてこのような事故が起こされたのか今はわかりませんが、これもイエス様から来たことで、主にはご計画があって、最善だけが成されていると信じています。

二十八歳のときにイエス様と出会ってから、いろいろな問題がありましたが、苦しいときにこそ、イエス様が近くて、イエス様のご愛に満たされます。私たちすべてを造られた神様の言葉は真実で、どんなに力があるものか、と改めて思いました。人間は失敗し間違えますが、神様は完全なお方で決して間違えません。聖書のみことばは真実で必ずその通りになると信じられるのは本当に幸いです。

聖書に出会えて、イエス様を信じることができて、イエス様のご愛の中に置いていただいて本当によかったです。これからも、イエス様だけを見上げてみことばに信頼して歩んでいきたいと願っています。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・3〜4）

室田恵子

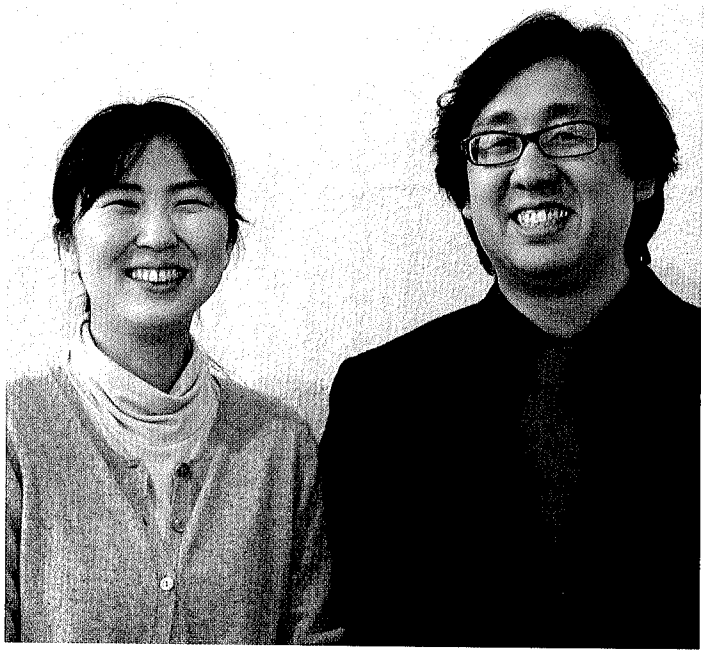
一九六〇年　北海道生まれ。

北海道岩見沢緑陵高等学校卒。

夫・勝美、一男二女、孫一人

将来と希望を与えてくださるイエス様

加藤　和彦



妻の実穂さんと

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

私は一九七三年四月十九日に正光・宏子の長男として生まれました。弟・育穂との四人家族でした。キリスト集会に初めて集ったのは十六歳のときでした。父の友人の和田兄姉に誘われ、家族四人で神戸集会に行きました。

そのときなぜついていったのか、覚えがなく、理由もありませんでした。神様はいる、とは思っていましたが、それがイエス様とつながっていませんでした。イエス様のことは歴史上の人物として知っていましたが、私自身の心の支えとして、100％真実で信頼できる方として受け入れるようになるのはずっと後でした。それをイエス様は少しずつ教えてくださいました。部活のこと、受験での失敗、関西の大地震などを通して、イエス様の御働きを体験し、イエス様は本当に生きて側にいてくだ

さる方なのだと思いました。また祖父母の救いを通し、家族の救いという、みことばの約束が真実であることを知りました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。（詩篇　145・18〜19）

フリーター時代には自分で何とかしようと頑張ってしまい、心がイエス様から離れていたときも、イエス様は見捨てずにいてくださいました。何気なく、買い物の帰りに集会所の前を自転車で通ったとき、ドイツの兄弟姉妹と集会の若い兄姉が笑顔で話しながら出てきたのに出会い、急に心の奥に穴が開いた感覚が生じ、兄弟たちとの距離がものすごく遠く感じられました。兄姉たちが輝いて見え、天国に行ったら、こんな感じなのだろうか？と思い、自分の中にある空洞や虚無感が嫌になり、絶対にイエス様を否定したくない、と思いました。

曲がっているものを、まっすぐにはできない。なくなっているものを、数えることはできない。（伝道者　1・15）

仕事はセブンイレブンの小売店社員です。バイト時代から合わせて十五年ほど、今の店で働いています。人間関係が苦手なうえ、理不尽な客が年々増え、またアルバイターの扱いも難しく、いろいろな事での対応に疲れ、心身ともにまいっていきました。そして、これでいいのだろうかと悩み始めました。シフトの都合上、喜びの集いにも全然行くことができないため、「家庭集会や喜びの集いに行きたい。ちゃんとイエス様につながりたい」と思い、仕事を辞める決心をしました。

この件では、両親に共に祈ってもらい、荷物がおりた気がしましたが、辞めるか、辞めないかは自分で決めずに、みこころに従いましょうということになりました。翌朝、喜びの集いの礼拝の前に、もう一度、みこころを教えてくださいと両親と共に祈り、礼拝に出ました。この日、ベック兄が交わってくださいました。「これからは就職が今以上に困難になること、働きながら次の仕事を探したほうがいいこと、就職の面接では、土日が休みの職場なので選びました、と簡潔に言うこと」などを話してくださいました。自分の思いとは、まったく逆でしたが、これが祈った結果なのかとすぐに気付かされ「はい。言われたとおりに従います」と返事しました。

この頃から、田無の兄弟の祈り会も始まりました。課題に出した祈りが次々に聞かれ、物事が進み、驚きと喜びで兄弟たちと、すごいすごいと喜んでいました。しばらくして結婚の話が出てきました。祈り会で祈っていただき、兄弟に交わってもらい、心に平安を持ちながら祈っていました。うまくいかない話もありましたが、みこころだけがなりますようにと祈っていました。うまくいかないときはイエス様が今回は「ここまで」とおっしゃっているんだと受け止めること、メールも祈って送ることなどを教えていただき、経験していきました。そうこうするうちに、両親からある姉妹のことを祈ってみないかと言われました。それが妻の実穂姉妹でした。それまで話したこともなく、顔を見たこともない人でしたが、祈るだけでもしてほしいと言われて、祈りました。ある喜びの集いのときに実穂姉妹と会うことになりましたが、顔を会わせ、最初に「みこころのままになりますように」と祈りました。その交わりで「祈っている人がいます」と言われ、この話もここで終わりになるのかなと思いましたが、交際はとぎれとぎれに続きました。会う機会は喜びの集いだけでしたから、共に祈る時間をくださいと切に願い、五分だけ時間をいただくこともありました。

池袋のメサイアコンサートで会うときも、前日に「人が少なく、静かな所、二人で祈れる所」と言われてパソコンで検索し、何箇所か探して話してみましたが乗り気ではありませんでした。なんで喜んでくれないのかと思っていたら、実穂姉妹に「祈りませんか」と言われ、「あ！」と我に返り、一つひとつ祈っていかないといけないことを思い出し、二人で祈りました。そして何も決めずに行ったところ、二人で祈る場所が備えられ、イエス様に感謝しました。

以前ある兄弟に「和彦には、和彦のことを、いいことも嫌なこともすべて受け入れてくれる姉妹が与えられるよ」、「それに和彦も姉妹のことを受け入れられるよ」とアドバイスをいただいたことがありました。姉妹と会うことができたときに、正直に自分の汚い部分と罪のことを話しました。「それは私も一緒です」と言ってくれました。イエス様はどんどん進めてくださり、結婚が決まりました。

名古屋の喜びの集いで結婚を発表した後、二人の顔を見ると平安がなさそうだから、結婚を取りやめて祈りなおしたら、と言ってくださった人がいました。びっくりしましたが改めて、一致して祈っていかないといけないと思いなおすことができました。準備期間中、式次第を印刷した後で間違いを教えてもらったときも、すぐ「はい」と言えず、言い訳をしてしまい、そのことで自分の愚かさを改めて知らされました。何のための結婚式か、結婚式を通してイエス様を紹介したいということを、もう一度思いなおすことができました。結婚式前日にもいろいろありましたが、御代田まで兄姉家族と共に行くことができ、平安に守られました。準備のために奉仕してくださっている多くの兄姉を見て、感謝で一杯でした。

二人の新しい生活が始まりました。自分には、いろいろな所に集いたいし、遊びにも行きたい、という思いがありました。スイス喜びの集いに参加したとき、妻は体調がずっと悪く、ほとんど寝ている状態でした。飛行機酔いだからと言われ、鈍感な私はそれを信じ、一週間近く妻に何もできずにいました。このままの状態ではいけないと思い、最終日の前日に医者にみてもらったところ、赤ちゃんを授かっていることを知りました。妊娠一ヶ月ではわからないことがほとんどのようですが、イエス様は教えてくださり、原因がわかった状態で帰国することができました。

安定期に入るまでの間、実穂はぐったりし、ふらふらの状態が続きました。今思えば申し訳ない気持ちですが、そのときはお互い初めてのことばかり、「もう限界、だめ、ギブアップ」と訴える妻に、「そんな発言は許さない」と冷たく言ってしまいました。本当にごめんなさい。

出産前の私は「子どもが生まれるとき、仕事は休めるだろうか。シフトを代われる人はいるだろうか」とあれこれ心配ばかりしていました。そんな中で、土曜日の仕事帰りに、妻から

「破水した」との電話がありました。同じ集合住宅の階上に住む狩俣兄姉家族に祈っていただき、手伝っていただきました。頭は真っ白でしたが心は落ち着いていきました。そして午前三時半ごろに無事生まれました。仕事場には何の迷惑をかけることもなく、心配する必要はなかったのです。

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

（マタイ　6・34）

ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。

（詩篇　146・1）

子どもの名前は「響喜」と言います。日々の歌189番の「心に響くは喜びの調べ」の響くと喜びからいただきました。名前を決めたのは礼拝のときでした。礼拝で190番を賛美していたとき、ふと隣の189番の題名が目に入り、響きか…いいな。でも一文字じゃ芸人と一緒か…そういえば「喜」は「き」と読むな。あ、ぴったりかな。これか！と思い、確信をいただきました。名前のことはずっと主に教えてくださいと祈っていました。

子育てのことでは、スイスで妊娠を知らされて以来、今でもそうなのですが、責任と重圧で押しつぶされそうになります。店で働いていると、この世の汚さと子どものずるがしこさ、悪さを目の当たりにしますから、こんな世の中で、どんなふうに育っていくのだろうと不安になります。でも、イエス様にゆだねて、できないのでお願いしますと祈ったとき、心が軽くなり、安心します。

仕事についてはずっと祈ってきましたが、今も同じところで働いています。結婚し、子どももいて、ますます辞めるわけにはいかなくなってきました。今も心身ともに疲れていますが、兄弟方や姉妹方の祈りに支えられて、なんとか続けられている状態です。たまにお店で会う兄弟姉妹の顔を見るとホッとし嬉しい気持ちになります。そしてイエス様は本当に私の側にいて、生活の隅々まで見ていてくださるのを感じます。例え

ば、響喜のことで早朝、帰宅を急いでいたとき、歩いて帰るつもりでいたら五分後にバスが来たり、今の給料では正直生活が苦しいのですが、いつもプラスマイナス・ゼロで喜びの集いに行く費用も備えられたり、子育てでわからないことが多く、祈っていると育児番組のテーマが自分たちの問題にほとんど当てはまっていたなど――。このようなことからも、イエス様の御計らい、やさしさを感じます。

結婚式のとき「相手の幸せをまず考えること」、祝福式のとき「私にはできません、おまかせしますと祈ること」、「ごめんなさいと正直に言えること」が大切と教えていただきました。このとおりにはなかなかできませんが、夫として、父親として成長していけるよう祈っています。そして何より、響喜が少しでも早くイエス様にごめんなさいをして救われてほしいと心から祈っていきたいです。

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。
（2コリント　12・9）

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。…してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。
（マタイ　7・7～8、11）

加藤和彦
京都府出身　京都市立北稜高等学校卒
セブンイレブン吉祥寺北町五丁目店勤務
妻　実穂、長男　響喜

わたしがあなたを贖ったのだ

加藤　実穂



夫の和彦さん、響喜くんと

私が幼少期の頃、両親は離婚しました。三つ上の兄と共に、母に連れられて行っていた教会でイエス様のことを知り、素直にイエス様は神の御子であられると信じるようになりました。高校生になり、家族関係が苦しくて、近くの教会へ自分から求める思いで行くようになりました。「たたきなさい。そうすれば開かれます」（マタイ　7・7）のみことばにすがるように、この状況から助けてください、と祈っていました。

そんなある日、私の中に人を憎む思いが潜んでおり、これこそが「罪」なのだと気づかされ、凍りつく思いになりました。このとき初めて、イエス様に心からごめんなさいと祈ったのです。そして、私の身代わりになってくださったイエス様を人生にお迎えして歩みたいと、受洗の恵みに与りました。その後、看護師となり病棟勤務をしながら、教会に通う生活へと導かれました。当初は意気揚々と取り組んでいましたが、いつしか自分の力に頼って聖書も開かなくなり、みことばに頼ることがなくなっていきました。いつもイライラし、激しくののしりたくなるような衝動をやっと抑え、心も体も次第に消耗していきました。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。

（詩篇　73・21～22）

むなしさでいっぱい。もう限界でした。ある日、教会の奉仕から疲れて帰ったとき「二度と教会には行かない！」と泣いて叫びました。「静まりたい」という思いで、一人聖書を読み、苦しみの中、助けを呼び求めていました。

しかし、あなたは大いなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神であられますから。・・・私たちに降りかかって来たすべての事において、あなたは正しかったのです。あなたは誠実をもって行なわれたのに、私たちは悪を行なったのです。

（ネヘミヤ　9・31、33）

大学病院を退職し、休養していた折、「見知らぬ方の葬儀だが、聖書の話が聞けるから行ってみないか」とお誘いがありました。みことばに飢え渇いていた私は一人で出かけることにしました。二〇〇六年、岐阜の新井稔兄弟の葬儀でした。

会場に着く前、「見も知らぬご家族の方に、なんと挨拶したらよいかわかりません」と祈り聖書を開くと、「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。…あなたがたは黙っていなければならない」（出エジプト　14・13、14）と書いてあったのです。黙っていなさいと命じられ、はい、と嬉しい気持ちで向かうことができました。会場で、一人静かに席に着き、いただいた冊子を開くと次のみことばが目に飛び込んできたのです。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

（ヘブル　12・5～6）

涙がボロボロこぼれ、「ここに光がある！この光がほしい！」と思いました。あとは太字のみことばにだけ目がうつり、ただ

ただ、うれしかったのです。「ああ、やっと主に関係を修復していただけた」と瞬間に感じました。「私は目に見えるもの、耳に聞こえるものに左右されてきたけれど、私と主との間に何ものも入れてはいけない。今、何もさえぎることなく主を見上げられるとは、なんと嬉しいことでしょう！」と涙が後から後から溢れたのです。その後、初めて名古屋のキリスト集会に集わせていただいたときは兄姉たちとお交わりをいただきました。また、週末の仕事の予定がキャンセルされるなどの不思議な導きのうちに、御代田の喜びの集いに参加することになりました。多くの兄弟姉妹のお交わりに加えていただき、イエス様を見上げる喜びに浸されたのでした。

ほどなく母もキリスト集会へと導かれ、喜ぶようになり、二〇〇七年には初めてドイツ喜びの集いに参加させていただきました。アイドリンゲンの小道を歩いていたとき、急に思い出したことがありました。それは、高校生の頃、看護師になりたいと言う私に、教会の牧師は「ベックさんたちのドイツのムッターハウスで訓練が受けられるといいね」とおっしゃったことでした。詳細は知らないままに、ドイツに行きたいという思いがずっと残っていました。散歩中にそのことを急に思い出し、十年のときを経て願いをかなえてくださった主のご計画に、ただただひれ伏す思いでした。

結婚については、祈っている人がいましたが、主が答えられるまで自分からは決して動くまいと思っていました。しかし、祈れど祈れど主からの答えはなく、苦しいときもありました。そして、あるキャンプ中に、主からの「答えがないこと」が答えなのだと、ストンと気づかされました。そして同じ日に、和彦兄弟のことを祈ってみませんかと話をいただいたのです。帰り道、どうしよう、と頭が一瞬真っ白になりましたが、すぐに、「私に決める権利はない。主が決められることなのだから、みこころならば必ず平安に導いてくださるだろう」と、気持ちが楽になりました。初めて出会って話し合ったときもずっと平安に導いてくださいました。そして、それまで祈ってきた方のことも、「祈ること自体ふさわしいことかどうかわかりません」と祈ると、みことばを通し、「終わりなさい。そして、和彦兄弟のことを祈り始めな

さい」と示され、安心して従う決意をいただけました。

結婚の準備の間、すべてがダメになったかのように思われたこともありましたが、兄弟姉妹を通し主が瞬く間に建て直してくださり、完成する様を見せてくださりました。私がこれをやったのだと言わせないように、との主の守りでした。また、結婚式には父や兄をはじめ親戚、知人に来ていただき、共に喜んでいただけたことは感謝でした。兄弟姉妹の皆様に祈っていただき、重荷を負っていただき、運ばれた式であったと心から感謝しています。

新婚旅行となるスイスキャンプで妊娠がわかり、新婚当初に計画したことはすべてとどめられる体験もしました。つわりと熱で廃人のように横たわる私に、同じマンションの二階の狩俣家から聞こえる祈り会の賛美は慰めでした。祈られるだけの存在であることの恵みを経験しました。

出産の朝、聖書を開くところはどこも「あなたは子を産む」とあり、安心して入院準備ができました。また、その日のうちになすべきことが次々と仕上げられる様を見せていただきました。兄弟姉妹に祈っていただき、この上なく平安な中で出産を迎えることができたのです。ただ主に運ばれただけ。感謝でいっぱいでした。親に対しては、結婚式の準備中、自分の誤った態度を示されたことがありました。兄弟に「さっきのは親に対する言葉ではないね」と指摘されたことがきっかけでした。実際、母と二人暮らしの期間が長く、共依存のようであり、私が母を支配していたところもありました。しかし、そのときまでまったく自分の態度に気づいていなかったのです。ある姉妹を通し「あなたは母親を、自分と同等か、自分より低く見ている」と指摘され、自分の中には相手を支配したい欲望、親に反発したい反抗心が根深く存在していると気づかされました。認めたくないけれど、認めざるをえない、私の中の頑なさ、強い性質でした。そんな私に、結婚を通し、親を敬うとはどのようなことか、主は少しずつ教えてくださいました。

子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。（コロサイ　3・20）

「初めに感謝する思いがなければダメだ。そして、こちらがお願いする立場にあることを忘れないように」と兄弟に言われたことがあります。結婚をすれば夫婦が一つの単位で、それぞれの親に向き合うのだから、自分勝手な態度で今までのように親と接することは、結婚した相手にも不誠実であると示されました。そして、母との間に不和が生じるときも、ごめんなさいと自分のあやまちを認め、相手を傷つけたことを思うとき、イエス様は介入してくださり本当に心から悪かったと思うようになりました。どのようなことも光の中に出し、自分が間違っていたと認めるか否かで、まったく心は変わっていきます。

最近、父のことを話すとき、私が厳しい顔をするので、兄弟から「実穂は、自分で家族を一つにしなきゃと思っている？」と言われ、ようやく自分が背負っていたことに気づかされました。また、ある姉妹との交わりを通しても、家族に対して主がなさったことを認めず、同意せず、自分の思いのまま、握り締めていたことを教えていただきました。

子育てにおいても、できないことを認めることの連続です。受け止めたいけれどもできない寛容のなさ、柔和のなさ、愛のなさを知らせられますが、それをそのまま認めてイエス様に明け渡しお任せするとき、なんとも言えない平安をいただけます。繰り返す自分の罪の性質は自分ではどうにもできず、みじめになることもたびたびです。しかし、イエス様はこんな私を買い取ってくださったお方ですから感謝です。

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。（ローマ　3・24）

わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。（イザヤ　43・1）

主ご自身のお約束を、今日も感謝して受け取り、心から御名を賛美いたします。

加藤実穂
愛知県出身、愛知県立江南高校卒、名古屋市立大学看護短大卒
夫　和彦、長男　響喜

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

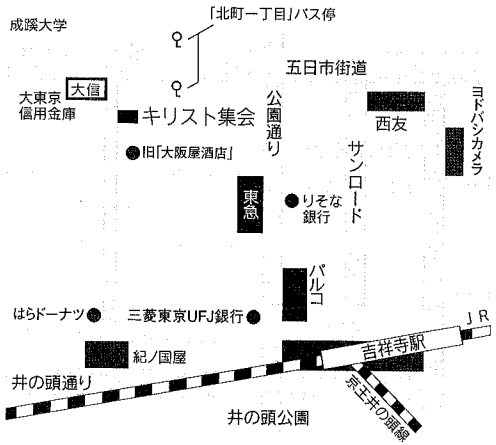
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

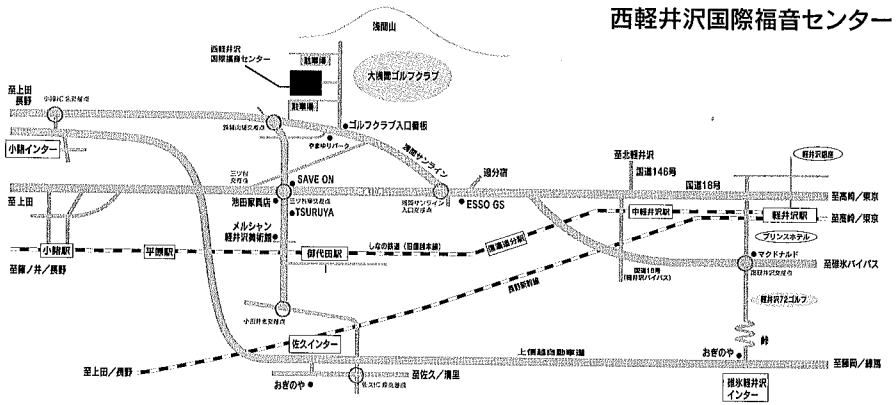
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



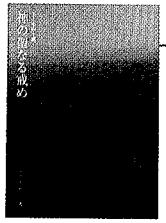
西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

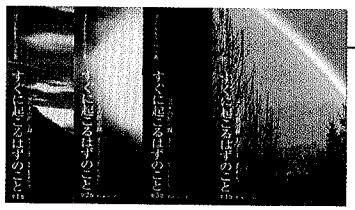
■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。

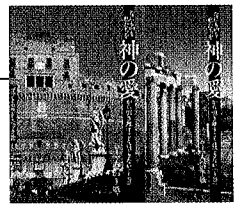


実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

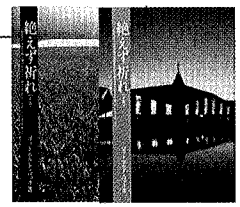
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第29号

定価100円（本体95円）2013年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

